令和6年度

年報

独立行政法人国立美術館

Independent Administrative Institution National Museum of Art

ANNUAL REPORT 2024

2024

目次 CONTENTS

1　総論　2

2　特徴的な取組　3

3　展覧会活動
- 3-1　所蔵作品展　11
- 3-2　企画展　15
- 3-3　映画上映等　22
- 3-4　巡回展　24
- 3-5　美術創造活動の活性化の推進　26

4　美術情報の収集・発信活動
- 4-1　情報資源発信に向けた取組　27
- 4-2　美術情報・資料の収集及び情報サービスの提供　28
- 4-3　我が国現代美術やメディア芸術の国際発信の推進、現代作家の国際発信支援等　31

5　教育普及活動
- 5-1　幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）及びラーニングコンテンツ等の開発　32
- 5-2　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等　32

6　調査研究活動
- 6-1　調査研究一覧　34
- 6-2　調査研究成果の発信　35

7　コレクションの形成・活用・継承
- 7-1　作品の収集　37
- 7-2　所蔵作品の修理・修復　44
- 7-3　所蔵作品の貸与　44

8　ナショナルセンターとしての活動
- 8-1　国内外の美術館等との連携・協力等　45
- 8-2　美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施　46
- 8-3　キュレーター研修、インターンシップ、博物館実習　46
- 8-4　アートカード・セット　46

9　決算報告　47

10　会員制度等　48

11　名簿　49

1

総 論

令和６年度は第５期中期目標期間の４年目であり、中期計画及び年度計画に沿って所定の事業を実施した。

1　美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

各館において多彩なジャンルをテーマとした展覧会を開催した。所蔵作品展においては、各館とも、調査研究の成果に基づき、季節に合わせた作品選定、企画展と連動したテーマ展示など時宜をとらえた企画を多く開催した。企画展においては、各館が専門性と社会性の双方に配慮し、国内外の優れた美術作品の紹介、地域文化の再評価、学術研究との連携、さらには現代的社会課題への意識喚起など、多様な観点から社会に貢献する企画展を推進した。主要なものとしては、パリ市立近代美術館、東京国立近代美術館、大阪中之島美術館という、20世紀のモダンアートを中心に収集してきた３館のコレクションから、共通点のある作品で３点１組のトリオを組み展示するという、ユニークな展示方法を試みた「TRIO　パリ・東京・大阪　モダンアート・コレクション」（東京国立近代美術館）、自身の心象風景を作品で表現する６人の現代工芸家の74点の作品による展覧会「心象工芸展」（国立工芸館）、装いをめぐる憧れや熱狂、葛藤や矛盾をともなって発露する私たちの内なる熱情や欲望を、ファッションに対する「LOVE」ととらえ、その多様なかたちを探った「LOVEファッション―私を着がえるとき」（京都国立近代美術館）、クロード・モネ晩年の芸術を紹介した展覧会「モネ　睡蓮のとき」（国立西洋美術館）、幅広い表現領域による作品制作や多彩な活動が知られる美術家梅津庸一の2000年代半ばからの仕事を総覧する大規模個展「梅津庸一　クリスタルパレス」（国立国際美術館）、近年海外での評価が高まってきている田名網敬一の作品を11章立ての構成で時系列に見せた「田名網敬一　記憶の冒険」（国立新美術館）等が挙げられる。

国立映画アーカイブにおいては、映画上映会・展覧会を開催した。主要なものとしては、1920年代から1960年代まで長きにわたり誠実かつヒューマニズムに満ちた作風を貫き、多くの名作を残した映画監督 田坂具隆（1902-1974）の偉大な業績を多面的に検証した上映会ならびに展覧会「没後50年 映画監督 田坂具隆」等が挙げられる。

国立美術館巡回展は京都国立近代美術館が担当し、２会場で開催したほか、国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業は、97会場において実施した。

教育普及活動においては、コロナ禍を経て定着したオンラインによるプログラムも併用しながら世代や背景を問わず幅広い層の美術鑑賞に対する関心を高める多彩なプログラムを展開した。国立アートリサーチセンターでは、あらゆる人が美術館にアクセスできる機会を充実させるため、ミュージアムにおけるアクセシビリティについて学ぶeラーニング講座の開設や、主に発達障がいのある方とその家族に向けたソーシャルストーリーの作成について、昨年度国立美術館版を制作したノウハウをもとに、国内３つの公立美術館の制作に協力するなどの事業を実施した。

また、日本の美術創造活動の活性化のため、国立新美術館において全国的な活動を行う美術団体等への展示室の提供や、我が国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供を行ったほか、美術に関する情報の拠点としての機能向上のため、「全国美術館収蔵品サーチ（SHŪZŌ）」や「メディア芸術データベース」の運用や我が国初のオンライン事典である「日本アーティスト事典」の拡充を行うとともに、所蔵作品等のデジタル化・データベース化等を進めた。

そのほか、来館者に向けて、多言語による各種案内、入場料金・開館時間等の弾力化、ミュージアムショップ・レストラン等の充実など、快適な観覧環境を提供するための様々な取組を継続的に行っている。

2　コレクションの形成・活用・継承

国立美術館の役割を踏まえた質の高いナショナルコレクションの形成を図るため、法人全体の作品収集方針等に基づき、体系的・通史的にバランスの取れた所蔵作品の充実に努めた。また、現代の美術動向を示す作品の同時代収集を進めた。

保存修復事業としては、緊急に処置を必要とする作品や貸出予定作品を中心に修理・修復を行うとともに、国立アートリサーチセンターと国立国際美術館の連携により国立国際美術館所蔵作品の材質の一部として用いられた鉛の劣化について、奈良文化財研究所の協力を得て調査を行ったほか、令和５年度に行った国立工芸館所蔵の杉浦非水のポスター作品の科学調査について、研究会を開き、国立美術館の担当者間で情報共有するなど、国立美術館における科学調査及び保存修復活動の促進に努めた。

そのほか、国立美術館相互の貸与を推進しつつ、国内外の美術館等への所蔵作品の貸与についても、所蔵作品の展示計画、作品保存等に配慮しながら可能な限り積極的に取り組んだ。

3　ナショナルセンターとしての活動

19年目となる「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を開催したほか、インターンシップ、キュレーター研修、博物館実習など人材育成に取り組んだ。

また、国立アートリサーチセンターにおいては、保存修復ワークショップ等の開催や国立美術館のコレクションを活用した「コレクション・プラス」を通じた国内外美術館等との連携促進、「全国美術館収蔵品サーチ（SHŪZŌ）」や「日本アーティスト事典」の拡充による国内美術資料の可視化と研究基盤の強化への貢献、アクセシビリティ講座や文化的処方の推進を通じ、美術と社会福祉を結ぶ新たな実践の実現、アーティスト支援を通じた日本美術の国際的価値向上と人的交流の推進等様々な事業を実施した。

2

特徴的な取組

東京国立近代美術館

重点的に取り組む女性作家の顕彰において、収蔵では多田美波、寺内曜子といった重要作家の収蔵に成功するなど着実な成果を挙げた。また所蔵作品展内では「フェミニズムと映像表現」などの展示を通して女性作家の再評価を進め、好評を得た。同じく重点的に取り組む地域的多様性への配慮において、沖縄の戦後美術を代表する作家の一人である真喜志勉の作品や、韓国の戦後美術を代表する作家であり、日本とも関係の深い朴栖甫の代表作を収蔵することができた。

企画展については、「TRIO　パリ・東京・大阪　モダンアート・コレクション」展と「ハニワと土偶の近代」展と二つのテーマ展を共催展として実現した。メディアと共催する展覧会の場合「個展」が優先される傾向にあるが、企画展の内容を豊かにするという意味で、テーマ展の開拓は美術館にとって重要である。テーマ展の場合、主題の選択、作家・作品の選択、展覧会の構成など、学芸員の研究の蓄積とキュレーションの力量が問われるが、両展覧会は、目標の動員も達成し観客からの評価も獲得できたという点で、大きな成果であった。

こども・子育て支援策として、こどもと一緒に気兼ねなく美術館を楽しんでいただける「Family Day こどもまっと2024」を昨年度に引き続き開催した。昨年度の実施結果を踏まえて、混雑緩和のため日時指定制を導入したほか、臨時の授乳室やキッズスペースの設置、事前予約不要のこども向けプログラムの実施により、アンケートでの満足度（「とても良い」「良い」）が昨年の82.7%から93%へと上昇した。また、美術館により親しんでもらうための試みとして、「ぬいぐるみお泊り会」（こどもたちが大切にしているぬいぐるみに美術館に泊まってもらい、作品を鑑賞したり、館で過ごしたりする様子を写真に収めてこどもたちにプレゼントすることで、美術館やアートに親しみをもってもらうための取り組み）を実施し大きな反響を得た。

MOMATサマーフェスでは、来館者アンケート等を参考に、普段は設置していない「飲食可能な休憩スペース」として建築家による仮設テーブルを設置。レストランによるテイクアウト販売と組み合わせることで、来館者層拡大と賑わいの創出につながった。

「フェミニズムと映像表現」会場風景
撮影：大谷一郎

「Family Day こどもまっと」の様子
撮影：haruharehinata

「ぬいぐるみお泊り会」会場風景
撮影：永井文仁

「MOMATサマーフェス」の様子
撮影：藤川琢史

国立工芸館

作品収集においては、収集方針にある「性別・年齢の偏りを是正する」ために、佐々木類《植物の記憶/うつろい》のシリーズ（2024年）、高橋朋子《金銀彩水指　游ぐ月》（2019年）など若手女性作家の作品を収蔵した。夏季には金曜、土曜に夜間開館を実施し新たな顧客の開拓につなげた。移転開館日の10月25日は中庭を開放し金子潤作品を間近で見られるイベントを恒例としているが、夏季の夜間開館開催時にも行ったところライトアップされた状態を至近距離で鑑賞できると高評価であった。また昨年度より導入したボランティア育成が進み、イベント補助等で活躍するようになった。

地域連携の面では、北陸新幹線延伸等を記念した石川県との協働企画として「食を彩る工芸 現代工芸と茶懐石の器展」を開催した。石川県を拠点に活躍する８人の若手工芸家が新たに制作した茶懐石の器と当館が所有する現代工芸家の手による茶道具を展示会場内の畳のうえにしつらえ、石川県らしい展示イベントとなった。

民間企業との連携においては、観光庁再始動事業補助金を活用、インバウンドの集客を目的とし国立工芸館と認定NPO法人趣都金澤が連携した体験型のプレミアムイベントツアーを2024年11月30日（土）に実施した。本事業は2024年11月29日（金）から12月１日（日）に開催された「Kogei Art Fair Kanazawa2024」開催期間中に併せて実施を行ったもので、当日は①企画展鑑賞解説および体験型鑑賞「タッチ&トーク」（工芸館が触察用に所有している工芸作品を活用し実際に触れて対話する特別な鑑賞プログラム）、②国立工芸館企画展に出展した現代工芸作家の工房見学などを行い、インバウンドツアー参加者からは工芸作品に触れ大変貴重な体験だったと高評価を得た。

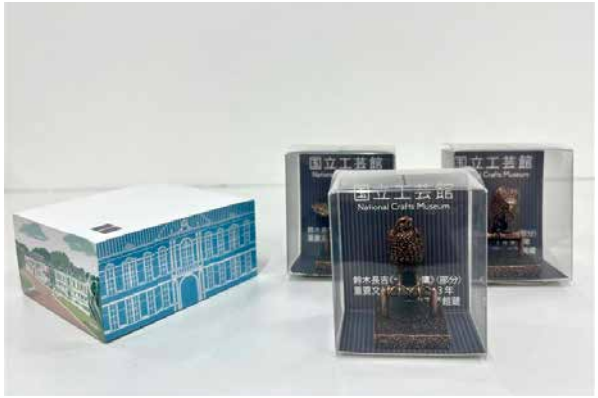
また、子育て支援事業として「キッズデー！」と銘打ち、こどもファスト・トラックを実施した。①2024年４月12日（金）、②７月15日（月・祝）、③11月24日（日）、④2025年１月２日（木）の４日間開催し、計133名（39組）の入館優先案内を行った。

ミュージアムショップでは、国立美術館唯一の直営店として、販売活動を通じて「日本のものづくり」の魅力を国内外に発信することを目指し、管理・研究部門協働によって各地の工芸やデザインの優品を選び、商品解説や制作者紹介の充実にも努めた。また、北陸地域や工芸にゆかりのある企業との連携によるオリジナルグッズを作成したり、展覧会内容に合わせたグッズを収集したりすることにより、利用者の工芸に対する関心を持つ深めるきっかけを作っていった。令和６年度は新規で３社とコラボをし８点の商品制作を実現している。

移転開館日記念イベント「ガラスの向こうの気になる「アレ」」

「食を彩る工芸 現代工芸と茶懐石の器展」会場風景
撮影：石川幸史

体験型鑑賞「タッチ&トーク」



国立工芸館ミュージアムショップ　オリジナルグッズ

京都国立近代美術館

令和６年度の作品収集では写真コレクションや洋画コレクションなどの一括収蔵があったが、企画展でも、京都服飾文化研究財団（KCI）のコレクションを中心に構成した「LOVEファッション―私を着がえるとき」や、遺愛品や筆記資料等の関連資料コレクションを多数展示して作品に劣らない主役とした「没後100年 富岡鉄斎」、倉俣が遺したノートやスケッチを展示することでその思考に迫った「倉俣史朗のデザイン―記憶のなかの小宇宙」などは、作品・資料の集合体が持つ意味や魅力を軸に構成したものだった。京都・関西の美術・工芸を主な対象とするという開館以来の基本方針に沿ったものとしては「生誕120年 人間国宝 黒田辰秋」「没後100年 富岡鉄斎」があった。また、どの企画展も、館所蔵の作品を多数活用することにより、館の作品収集の成果を世に問うことにもなった。

所蔵作品展は、年度をまたぐものを含めて４回開催。どの回も企画展と緩やかに連動した小規模な企画展の集合体のような構成となった。また、所蔵作品展会場の一部を使用した中規模企画展として、国立工芸館との共催による「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957–1979」を開催した。

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業「感覚をひらく」も、令和５年度までは文化庁の助成により実施してきたが、令和６年度も新たな形で継続した。文化庁と京都新聞の主催による「CONNECT⇄_～アートでのびのび ひろがるわたし～」には、他の岡崎地区所在の文化施設とともに参加し、障がいの有無に関わらず共に参加できるワークショップ等を開催した。また、美術館デビュー応援プログラム「リング・リング・ロング」と題して、１階ロビーに、小さなこどもと家族が安心して過ごせる場所を約２カ月間設け、子連れでの美術館利用についての具体的なニーズを把握することができた。

「倉俣史朗のデザイン―記憶のなかの小宇宙」会場風景
撮影：消忠之

「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957–1979」会場風景
撮影：守屋友樹

鑑賞ワークショップ「手だけが知ってる美術館 第6回 どこからさわる？どうさわる？」実施風景
撮影：守屋友樹

美術館デビュー応援プログラム「リング・リング・ロング」会場風景
撮影：成田舞

国立映画アーカイブ

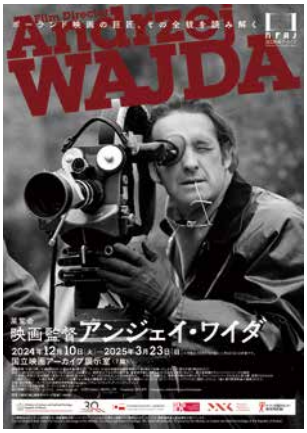
上映活動として、メキシコ国立自治大学（UNAM）フィルモテカ、メキシコ・シネテカ・ナシオナル、メキシコ映画機構（IMCINE）との共催で、無声映画期から1980年代にいたるメキシコ映画を通史的に取り上げた「メキシコ映画の大回顧」、展覧会と連動した「日本映画と音楽 1950年代から1960年代の作曲家たち」、「没後50年 映画監督 田坂具隆 」、「映画監督 アンジェイ・ワイダ」など、計11企画を開催した。

展示活動として、戦後の映画界で活躍した作曲家たちの功績を顕彰する「日本映画と音楽 1950年代から1960年代の作曲家たち」、常に人間描写に重きを置き、誠実かつヒューマニズムに満ちた作風を貫いた映画監督を紹介する「没後50年 映画監督 田坂具隆」、ポーランドの諸機関との共催により、ポーランド映画を代表する巨匠の業績をたどる「映画監督 アンジェイ・ワイダ」を開催した。

教育普及事業では、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント「マグネティック・テープ・アラート：磁気テープ映像の保存に向けてできること」を開催し、配布資料や記録動画等を館公式サイト上から公開し、多数の取材対応も含め、情報発信を行った。こども向け事業では恒例の「こども映画館」と「V4中央ヨーロッパ子ども映画祭」を開催し、前者は参加型の企画も取り入れ、その企画やフィルム収蔵庫の紹介動画を公開した。また、フィルム映写の教材動画の制作を行った。館外共催上映では、シネマテーク・フランセーズとの「三隅研次監督特集」やアメリカでの映像美術館（MoMI）他との「映画監督：清水宏」、北海道から沖縄までの全国巡回「優秀映画鑑賞推進事業」等を開催した。

その他、館の公式サイトを11月にリニューアル公開した。また、明治時代に撮影された映画をデジタル化し公開するWEBサイト「映像でみる明治の日本」上で仏・リュミエール社が明治の日本を撮影した29作品を新たに公開したほか、令和７年３月にはWEBサイト「はじまりの日本劇映画　映画 meets 新派・新劇・新国劇」を開設した。

『女隊長アングスティアス』（1950年、マティルデ・ランデタ監督）
（「メキシコ映画の大回顧」より）



展覧会「映画監督 アンジェイ・ワイダ」
チラシ

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント
「マグネティック・テープ・アラート：磁気テープ
映像の保存に向けてできること」チラシ

WEBサイト「はじまりの日本劇映画　映画 meets 新派・新劇・
新国劇」

国立西洋美術館

所蔵作品展、企画展ともに目標入館者数を大きく上回ることができた。企画展では「モネ 睡蓮のとき」展が様々な取組みにより目標入館者数48万人に対し80万人強と約170%の実績となり歴代４位の入館者数を記録して所蔵作品展の入館者数増や公式ホームページのアクセス増にも貢献した。このほか国立西洋美術館ではじめて現代美術を本格的に扱った「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？――国立西洋美術館65年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ」展は若い観客層を掘り起こし、「内藤コレクション　写本 ― いとも優雅なる中世の小宇宙」展は、国内では希少な中世写本の鑑賞機会として注目を集めた。

教育普及事業では、養成研修を経た６期ボランティア・スタッフが活動を開始した。また、多様なプログラムを継続的に実施し、手話通訳の手配、デジタル補聴援助システムの貸し出し、障がいをもつ方や小さなこども連れの方が参加しやすいコンサートの実施など、既存のプログラムにおいてアクセシビリティを向上させた。このほか、親子向けに快適な鑑賞環境を提供する取り組みとして「託児サービス」「ゆったりBABY DAY」「こどもファスト・トラック」を導入した。

公式SNSでは、事業・活動や収蔵品について積極的な情報発信（日英バイリンガル）に努め、フォロワー数が増加した。

作品収集では、フェーデ・ガリツィアとラヴィニア・フォンターナという希少なオールドマスターの女性画家２人の作品を購入できたことは特筆に値する。また、148点におよぶ国内では極めて稀なエマーユ・コレクションの寄贈受け入れによって、装飾芸術のコレクションに新たなジャンルが加わり、1900年前後のフランス近代美術の厚みが増した。

所蔵作品・資料の修理では、購入直後の作品を短期間で常設展示に出せるようにするなど、職員として修復家を配置できている強みを発揮できた。

世界遺産に関しては、「ル・コルビュジエの建築作品」世界遺産資産７カ国による「第10回国際常設会議」を開催した。

さらに、寄附金やファンドレイジングを通じて自己収入の増加に努め、特に経営企画・広報渉外室を中心に企業からの協賛獲得に取組み、多額の協賛金収入を獲得できた。

「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？
――国立西洋美術館65年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ」会場風景
竹村京《修復されたC.M.の1916年の睡蓮》2023-2024年、静岡県立美術館蔵
クロード・モネ《睡蓮、柳の反映》1916年、国立西洋美術館　松方幸次郎氏御遺族より寄贈（旧松方コレクション）
撮影：上野則宏

ボランティア・スタッフによる「美術トーク　※日本手話通訳付き」

「ゆったりBABY DAY」当日の様子

企画展「モネ 睡蓮のとき」見どころ紹介動画シリーズ
「Exhibition Highlights」よりEp.3「ときを超える睡蓮、ゆれる夢の反映」、2024年12月19日配信

国立国際美術館

令和６年度は、年度をまたぐものを含めて、４本の企画展と３本の所蔵作品展を開催した。所蔵作品展は、テーマ性を有する内容により展示替えを行い、企画展に応じた回数を実施しているが、建物工事の影響により、会期途中で「コレクション２ 身体———身体」を中止し、予定していた展示替回数を１回減ずるなど大幅に縮小せざるを得なかった。一方で同時期に開催の企画展「梅津庸一 クリスタルパレス」の会期中に近年の収蔵作品を含む９点を無料で公開するなど、来館者サービスの維持に努めた。このほか、近年収蔵した作品を中心に既存の枠組みを解体し、新たな視座の提示を求めることをテーマにした企画展「ノー・バウンダリーズ」は、近年の作品輸送等にかかる経費が高騰する状況下で、所蔵作品を積極的に活用した企画展の企画・実施が、今後の当館の重要な事業となりうることを確認する機会となった。

作品収集では、近年国際的な再評価が進む日系アメリカ人作家ルース・アサワの彫刻作品をはじめ９点の寄贈を含む29点の収蔵がなされた。国内美術館では初となるアサワ作品の収蔵は、海外に拠点を置く日本・日系人作家に関する研究の一助になると考える。またジェンダー・バランスへの配慮という点からも特筆すべき作品である。

教育普及活動においては、だれもが建物を楽しむことのできる触察ツールとして前年度に開発した「たてもの鑑賞サポートツール」を活用したユニバーサル・プログラム「みる＋プラス」を実施し、参加者は当館の建築を視覚以外の感覚も使いながら体験した。

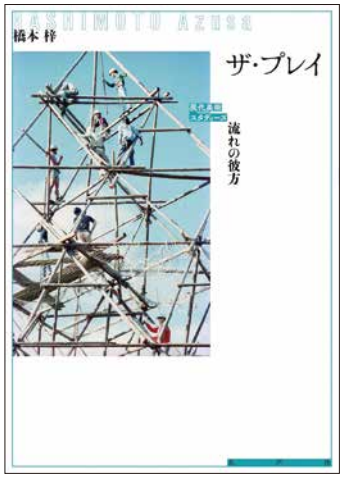
また、国立映画アーカイブとの共催で第27回中之島映像劇場「1970年」を開催した。2025年、大阪では関西万博が開催されること、また当館が1970年に開催された大阪万博にも歴史的繋がりを持つことから、1970年の大阪万博を切り口に映像について考える内容として実施した。

研究員の調査研究活動としては、2010年より継続してきた関西の前衛美術集団ザ・プレイの調査研究について、その50年にわたる活動をまとめた単著『現代美術スタディーズ　ザ・プレイ―流れの彼方』を上梓した。本書は以後のザ・プレイの研究および日本の戦後現代美術研究において、重要な文献となることが期待される。

このほか、当館と大阪中之島美術館をつなぐ歩行者デッキが開通し、地域の回遊性が大幅に向上した。

「ノー・バウンダリーズ」会場風景
撮影：福永一夫

無料公開した所蔵作品展示の会場風景
撮影：福永一夫



橋本梓『現代美術スタディーズ　ザ・プレイ―流れの彼方』（水声社）

大阪中之島美術館とつながる歩行者デッキ全景

国立新美術館

令和６年度は、近代美術、現代美術、マンガ、パフォーマンス、建築まで多様なジャンルの展覧会を開催した。「マティス 自由なフォルム」はマティスの「切り紙絵」に焦点を当てる充実の展示を実現した。コロナ禍により顕在化した社会の諸問題に向き合う内外の８名＆１組の作家を紹介した「遠距離現在　Universal / Remote」は、時事的なテーマで現代の表現を検証する機会となった。女性４人の創作集団CLAMPの35年の活動を包括的に紹介した「CLAMP展」では、公開の機会が少ない原画を約800点展示し、日本のマンガ文化の豊かさと多様性の国内外への発信に貢献した。「田名網敬一　記憶の冒険」は国内初の大規模個展として、多ジャンルを横断する稀有な創作活動の全貌を約500点の作品で網羅的に紹介した。「荒川ナッシュ医 ペインティングス・アー・ポップスターズ」は、パフォーマンス・アーティスト、荒川ナッシュ医の活動をアジア圏の美術館では初となる個展として紹介し、現代の表現活動の鑑賞機会を提供した。「リビング・モダニティ　住まいの実験 1920s–1970s」は８年ぶりとなる建築展であり、様々なジャンルの芸術を紹介するという館のミッションを達成することができた。パブリックスペースでの小企画シリーズ「NACT View」では「和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT」を開催し、現代美術に気軽に親しめる機会を継続的に提供した。

美術関連資料の収集・デジタル化・特別資料閲覧も継続して行い、国内の展覧会への資料提供等、情報発信に努めた。また、展覧会情報検索「アートコモンズ」のクラウド化およびアクセシビリティの向上のためリニューアルを行い、10月に公開を開始した。

教育普及活動では、国立アートリサーチセンターとの共同企画のプログラムとして、令和５年度にトライアルを行った「法人向けアーティスト・ワークショップ」を、２組のアーティストを講師に迎え、２法人に対して実施した。参加者・参加企業から高い評価を得、本格事業化の初年として良いスタートを切ることができた。また、令和４年度に立ち上げた、中高生を対象とした長期ワークショップ「NACT YOUTH PROJECT 新美塾！」の第３期を実施し、10代の参加者12人が塾長役の現代美術家とともに、半年間にわたり「表現」について考え学ぶプログラムに取り組んだ。新美塾！の活動は令和６年度をもって一旦終了し、３月にはトークイベントを開催、これまでの活動と成果について広く周知する機会となった。

「マティス 自由なフォルム」会場風景
撮影：中川周

「遠距離現在　Universal / Remote」会場風景
Photo by Keizo Kioku

「CLAMP展」会場風景
©CLAMP・ShigatsuTsuitachi CO.,LTD. ©C,ST/CEP

「NACT YOUTH PROJECT 2024 新美塾！」

国立アートリサーチセンター

２つのシンポジウム「美術館のアクセシビリティ―共生社会に向けて、対話のある“合理的配慮”とは？」「美術館の持続可能な運営モデルとは？～寄附・寄贈の可能性」を開催した。また文化芸術活動基盤強化基金（Japan Creator Support Fund）による「JUMP アーティスト＋キュレーター国際協働プログラム」を企画し実施した。

各館コレクションを活用した新事業「国立美術館コレクション・プラス」を開始し、栃木県立美術館で同館所蔵の刑部人作品に加え、国立西洋美術館所蔵のギュスターヴ・クールベ作品２点を展示、両者の影響関係を明らかにし、地元ゆかりの作家に新たな光を当てた。保存修復では、東京文化財研究所との共催により写真の保存に関するワークショップを行った。

アーティストの国際発信支援やスタディ・ツアーに加え、若手キュレーター育成を目的に台湾C-LABとの覚書、日韓近現代美術研究のため韓国MMCAと覚書を締結、日豪交流ではニュー・サウス・ウェールズ州立美術館シニア・キュレーターのリサーチをサポートしたほか、パリのポンピドゥー・センターと交流事業を開始し、国立西洋美術館との間でキュレーター相互派遣を行った。

文化庁委託事業によるeラーニング講座「ミュージアム・アクセシビリティ講座 ふかふかTV」では、受講生681名が「合理的配慮」「情報保障」の基礎知識を修得した。またJST「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（東京藝術大学他との共同研究）の一環として、川崎市市民ミュージアムの展示・ワークショップ、文部科学省主催のプレ万博展示において「文化的処方」の提案を行い、ガイドブック『文化的処方のはじめの一歩』を刊行した。

各館と「企業・団体向けアートプログラム」を企画開発・実施したほか、連携事例を紹介する動画・事例集「Shake Hands 企業×美術館 ひろがる可能性」を制作した。また「美術館に関する意識調査」の公開、対象を若年層に特化した新たな調査の設計・実施を行い、美術・アートとの接点等を探った。

先端技術を活用した各館へのデジタルコンテンツ制作支援に取り組み、東京国立近代美術館「プレイバック「日米抽象美術展」（1955）」におけるスクリーン投影型3Dインタラクティブコンテンツ（展示名称：再現VR）や、国立美術館のクラウドファンディングにより実現した国立西洋美術館「みんなの3Dロダン図鑑」における4K動画コンテンツ等を制作した。

NCARシンポジウム005「美術館の持続可能な運営モデルとは？～寄附・寄贈の可能性」
撮影：io

国立美術館 コレクション・プラス「刑部人とギュスターヴ・クールベ 風景画家たちの眼」（栃木県立美術館）会場風景

文化庁委託事業 令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業「ミュージアム・アクセシビリティ講座 ふかふかTV」

東京国立近代美術館所蔵作品展「MOMATコレクション」小特集「プレイバック「日米抽象美術展」（1955）」（2024年4月16日～12月22日）再現VRの展示風景

3 展覧会活動

3—1　所蔵作品展

所蔵作品展の開催は、国立美術館の基幹となる活動のひとつであり、各館とも、漫然と名作を並べて展示するのではなく、調査研究の成果に基づき、これまで国内では紹介が限られていた分野に焦点を当てた小企画展や教育普及室との連携による来館者の鑑賞意欲を高める問いかけを組み込んだ展示構成とするなど、様々な工夫を凝らして鑑賞意欲や来館動機を高めるとともに、来館者の満足度の向上に努めており、満足度調査結果は目標値を上回る結果をあげた。さらに、地域との連動を意識した広域的な文化ネットワークに留意した展示やジェンダー・バランスの是正に配慮した展示を行うなど、所蔵作品を新たな切り口で提示する工夫を凝らし、コレクションの魅力を多角的に発信した。

館　　名	開催日数	展示替回数	入館者数	満足度※1
東京国立近代美術館	259	5	227,698	92.6%
国立工芸館	128	3	19,519	96.0%
京都国立近代美術館	285	4	121,249	79.2%
国立西洋美術館	275	3	690,302	93.3%
国立国際美術館	111	2	45,446	79.1%
合　計	1,058	17	1,104,214	88.0%

※1 「満足度」とは、満足度調査における「良い」以上の回答率を指し、合計欄に記載の値は平均値である。以下同じ。

東京国立近代美術館

19世紀末から今日に至る日本の近現代美術の流れをわかりやすく伝えるとともに、展示室ごとにテーマを設けて各時代の美術を新鮮な切り口から提示した。

４月からの会期においては、教育普及室との協働により、鑑賞のきっかけとなるような問いかけを示した特集を企画、国内外の来館者から好評を得た。９月からの会期では、シュルレアリスム宣言から100年の節目にあたり、マックス・エルンストの新収蔵品をはじめコレクションから国内外のシュルレアリスムの作品や資料を集めた「シュルレアリスム100年」、戦後の前衛美術において高い評価を得た芥川（間所）紗織の生誕100年関連展示などを行った。２月からの会期では、国際的な共同研究を前提に新収蔵となったジャン（ハンス）・アルプの石膏複製を紹介する企画などを行った。またギャラリー４においては、小企画としてフランスの女性彫刻家ジェルメーヌ・リシエを中心とした展示や「フェミニズムと映像表現」を実施し、年間を通して特色ある展示を多く開催した。

「シュルレアリスム100年」会場風景
撮影：大谷一郎

「アルプのアトリエ」会場風景
撮影：柳場大

国立工芸館

令和６年度の所蔵作品展は夏期及び冬期に開催した。夏期には「おとなとこどもの自由研究　工芸の光と影展」を開催した。手に触れることの出来ない光と影に量感を与えることができる工芸ならではの表現に着目し、人間心理にも働きかける現象として提示したものである。家族連れの来館者向けにこどもでも楽しめるようスタンプラリーやワークシート、また大人向けのセルフガイドである「自由研究ノート」等を用意した。

冬期には「反復」と「偶然」という、工芸及びデザインを特徴づけるふたつの性質に注目した展覧会を開催した。模様や造形の反復に加え、制作行為も反復運動によっている工芸の特質を明らかにした。また制作工程では火や温湿度といった自然現象に左右され偶然の産物である意匠が生まれることもしばしばであり、相反するように見える反復と偶然という工芸やデザインの特徴を示した展覧会であった。

おとなとこどもの自由研究　工芸の光と影展」会場風景
撮影：岡村喜知郎

「反復と偶然展」会場風景
撮影：石川幸史

京都国立近代美術館

令和６年度も所蔵作品展の多くの回で企画展とテーマを合わせた展示を開催した。「鉄斎を慕う洋画家たち」では、企画展「没後100年 富岡鉄斎」に合わせ、鉄斎が洋画家から高く評価を受けていたことに焦点を当て、鉄斎を慕った洋画家たちの作品を展示することで、企画展に新たな視点を加える構成とした。企画展「LOVEファッション―私を着がえるとき」の会期中には「愛と欲望とファッション」と題して、元田敬三や都築響一の写真作品を展示した。過去に開催したファッション展にあわせて収蔵した作品を多く含み、企画展が収集につながり、収集した作品が新たな企画展ともつながることを示し、美術館活動の有機的な連関を作品を通して伝えることができた。また、関西の他館の展覧会と連動する内容の展示も行った。第１回コレクション展の「ピカソとアルベール・グレーズ」は京都市京セラ美術館で開催された「キュビスム展―美の革命」と、第３回「志村ふくみと紬織」は滋賀県立美術館の「生誕100年記念 人間国宝 志村ふくみ展 色と言葉のつむぎおり」とそれぞれ関連した内容となっており、関西の公立館とのつながりが見える展示を行うことができた。

「鉄斎を慕う洋画家たち」会場風景

「志村ふくみと紬織」会場風景

国立西洋美術館

令和５年度に引き続き、年代順を基本としつつテーマ性も兼ね備えた所蔵作品展示を行うとともに、小展示コーナー（Collection in Focus）を複数設けた。特定のモティーフや主題に着目して時代や地域を越えて作品を比較考察した小展示のほか、数年にわたる修復処置を終えて初公開にいたった旧松方コレクションのルネサンス絵画にフォーカスした小展示は、令和５年度に続いて好評を博した。

常設展示室内では小企画展を計４回開催した。そのうち「オーガスタス・ジョンとその時代―松方コレクションから見た近代イギリス美術」では、日本では紹介される機会が少ない近代イギリス美術の諸相を松方コレクションという切り口から新たな光をあてるとともに、松方コレクションの研究成果の進展を示す学術的意義の高い展示となった。

「Collection in FOCUS　糸を紡ぐ女性の表象：カヴァッリーノとセガンティーニ」
撮影：上野則宏

小企画展「西洋版画を視る―リトグラフ：石版からひろがるイメージ」会場風景
撮影：上野則宏

国立国際美術館

国立国際美術館の所蔵作品展は、いわゆる所蔵作品が常設展示化されたものではなく、企画展の会期にほぼ応じた会期設定のもと展示替えを行いながら実施している。近年は、従来以上にテーマ設定を強化し、新収蔵作品のお披露目など近年の新収作品の積極的な活用を意識した展示を行っている。令和６年度は、表現およびその行為と切り離せない主題、問題であり続けてきた「身体」をテーマにした「コレクション２　身体———身体」、またジェンダーの観点から所蔵作品の見直しが大きなテーマになっている中で、作品の中の女性像に焦点をあて、個人史や社会的背景に注目する「コレクション１　彼女の肖像」、さらにブルジョワ、ルース・アサワ、レオノール・アントゥネス等の収蔵作品を起点に素材と制作行為に着目した「コレクション２　Undo, Redo わたしは解く、やり直す」を開催した。所蔵作品群に新たな切り口でテーマ設定することで、これまでとは異なる解釈や提示が実施できた。またテーマに沿った作品選定を進める上で、当館に欠けている作家、作品も浮上し、今後の収集候補作品を検討する一助にもなった。

「コレクション１　彼女の肖像」会場風景
撮影：福永一夫

「コレクション２　Undo, Redo わたしは解く、やり直す」会場風景
撮影：福永一夫

3―2　企画展

各館において、調査研究の成果に基づき、世界の美術の新たな動向を紹介する展覧会や我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会、メディアアート等の先端的な展覧会、作家・作品の再発見、再評価、我が国に所在するコレクションの積極的活用を目指した展覧会を開催した。国内美術館との連携により主に国内所蔵作品で構成した企画展、最新の研究成果を盛り込んだ現代作家の個展を行うなど、意欲的な取組を行った。

来館者満足度調査及び入館者数とも前年度を上回り、いずれも美術振興の拠点として国立美術館にふさわしい魅力と質の高さを備えた展覧会であった。

館　名	実施回数	開催日数	入館者数	満足度
東京国立近代美術館	4	187	218,050	80.9%
国立工芸館	2	132	20,780	88.8%
京都国立近代美術館	5	238	120,008	93.8%
国立西洋美術館	4	231	975,754	87.3%
国立国際美術館	4	238	124,367	96.9%
国立新美術館	6	316	581,746	93.8%
合　計	25	1,342	2,040,705	90.3%

東京国立近代美術館

「TRIO　パリ・東京・大阪　モダンアート・コレクション」では、パリ市立近代美術館、東京国立近代美術館、大阪中之島美術館という、20世紀のモダンアートを中心に収集してきた3館のコレクションから、共通点のある作品で3点1組のトリオを組むという、ユニークな展示方法を試みた。各トリオでは、日本と西洋の作家が文脈を越えて比較され、従来のような西洋から日本への一方通行的な影響関係を示すのではなく、同じ時代に活躍した異なる出自をもつ芸術家による作品の共通点とそれぞれの個性に斬新な角度から光を当てた。トリオという枠組みを採用することで、これまで展示の機会が少なく、あまり知られることのなかった作家の作品を新たな視点で捉え直し、広く紹介することができた。

「ハニワと土偶の近代」は、近代美術館において「ハニワと土偶」を掲げた企画の意外性から、インパクトをもって受け入れられた。ハニワや土偶などの出土遺物は、前衛/伝統、分野を問わず、近代において美術や文学やサブカルチャーのモチーフとなり、幅広い領域で熱狂的なブームを巻き起こしてきた。本展覧会は、このような出土遺物を美的に鑑賞するという近代的な文化現象を、明治から現代まで時代背景とともに考察し、ハニワや土偶に向けられた視線の変遷を歴史的に辿るはじめての機会となった。美術史にとどまらず、工芸、建築、写真、映画、演劇、漫画、文学、伝統芸能、思想、教育まで幅広い分野を渉猟し、戦中・戦後の日本におけるアイデンティティをめぐる近代文化史、精神史として描き出すユニークな試みとして注目を集めた。展覧会図録は美術を中心に、文化史の舞台に躍り出たハニワや土偶といった出土遺物の系譜をまとめており、表紙のハニワの顔の型抜が愛らしい点、企画等総合的に高く評価され、第66回全国カタログ展において最高賞である経済産業大臣賞を受賞した。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
中平卓馬　火―氾濫	(R6.2.6) R6.4.1　～　R6.4.7	6 (55)	8,251 (36,670)	朝日新聞社	84.0%
TRIO　パリ・東京・大阪 モダンアート・コレクション	R6.5.21　～　R6.8.25	83	97,768	大阪中之島美術館、日本経済新聞社、テレビ東京、BSテレビ東京	83.9%
ハニワと土偶の近代	R6.10.1　～　R6.12.22	73	83,055	NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社	75.8%
ヒルマ・アフ・クリント展	R7.3.4　～　R7.3.31 (R7.6.15)	25 (91)	28,976 (135,286)	日本経済新聞社、NHK	―
合　計		187	218,050		80.9%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「TRIO　パリ・東京・大阪　モダンアート・コレクション」会場風景
撮影：木奥惠三

「ハニワと土偶の近代」図録

国立工芸館

重要無形文化財「志野」の保持者・鈴木藏（1934-）は、薪窯でしか焼けないとされていた「志野」にガス窯で挑戦し、自然への畏敬の念を重んじつつ「新しくて、力強いもの」という造形思考を貫く中で、独自の美意識を映し出す作陶スタイルを確立した。「卒寿記念　人間国宝　鈴木藏の志野展」は、鈴木の卒寿を記念して企画され、初期から最新作までを器形やテーマに分けて４章立てで紹介し、各章には１つずつコラムを設けて、素材や道具、特徴的な取り組みに加え、制作の拠り所となった安土・桃山時代の優品や、鈴木の陶芸観を受け継ぐ長男・徹、三男・健の作品もあわせて展示紹介した。これらの展覧会構成により、鈴木の作品の変遷に加え、古陶と現代を繋ぐ作陶姿勢や、自然観から生み出される造形思考を結びつけ、鈴木の制作における特徴的なスタイルを浮かび上がらせる展覧会となった。

「心象工芸展」では、現代工芸家６名による、自身の心象風景を表現した74点の作品を紹介した。技術偏重ではなく、絵画や彫刻と同様に作家の思いを表現した作品を示すことで、工芸の幅広さを提示し、観覧者が自身の内面と向き合う機会を創出した。コンセプト重視の現代アートが行き詰まりを見せる中で、高い技術力に裏打ちされた日本の現代工芸が、海外で高く評価されている背景を紹介する機会にもなった。さらに、来館者に作品の良さをより伝えられるよう「見せる」ことにこだわり、各作家ごとにテーマカラーを設定し作家の個性や作品の特徴が伝わるよう工夫した展覧会となった。専門の照明デザイナーに依頼し、作品の色味はもちろんのこと作家の見せたい部分が強調されるような、しかし受け手を拒絶しないような空間づくりを意識した結果、来館者から良い反応を得られた。

展覧会名	会　　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
卒寿記念　人間国宝　鈴木藏の志野展	（R6.3.19） R6.4.1　～　R6.6.2	57 （69）	7,873 （9,881）	NHKエンタープライズ 中部、北國新聞社	87.9%
心象工芸展	R6.9.6　～　R6.12.1	75	12,907	―	89.4%
合　計		132	20,780		88.8%

注　（　）内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展」会場風景

「心象工芸展」会場風景

京都国立近代美術館

「没後100年 富岡鉄斎」は、富岡鉄斎の没後100年を記念して開催した。富岡鉄斎については、近年の学術研究により新たな知見がもたらされ、諸外国でも注目が高まりつつある一方、国内ではかつてほどの知名度を保っていない状況にある。こうした中で本展覧会の開催にあたっては、新知見を盛り込んで新たな鉄斎の像を提示するとともに、一般にも鉄斎が親しみやすく感じられるように工夫をし、企画を行った。作品選定においては、円熟期の重厚な代表作とともに初期の清新な作品にも注目し、従来の鉄斎展であまり取り上げられなかった花卉や蔬菜など親しみやすい画題の作品も取り上げるとともに、章構成にも工夫を凝らし、鉄斎の画業だけではなく、日常生活をも垣間見ることができるような構成とした。

京都服飾文化研究財団（KCI）との９度目のコラボレーションとなる「LOVEファッション―私を着がえるとき」では、装いをめぐる憧れや熱狂、葛藤や矛盾をともなって発露する人間の内なる熱情や欲望を、ファッションに対する「LOVE」ととらえ、その多様なかたちを探った。今回の展覧会では、KCI所蔵の18世紀の宮廷服から現在活躍するデザイナーの作品までを含む衣装コレクション約120点を中心に、現代美術や文学作品からの引用を織り交ぜ、人間が服を着ることの意味や奥深さについてジャンルの垣根を越えて見つめ直す機会とした。会場での撮影を全面的に容認したことで、来場者によるSNS投稿が促され、広報面での効果も得られた。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
没後100年 富岡鉄斎	R6.4.2 ～ R6.5.26	48	28,363	清荒神清澄寺 鉄斎美術館、毎日新聞社、京都新聞	91.6%
倉俣史朗のデザイン ―記憶のなかの小宇宙	R6.6.11 ～ R6.8.18	60	28,333	朝日新聞社	95.0%
LOVEファッション ―私を着がえるとき	R6.9.13 ～ R6.11.24	63	37,659	公益財団法人京都服飾文化研究財団（KCI）	92.2%
生誕120年 人間国宝 黒田辰秋 ―木と漆と螺鈿の旅―	R6.12.17 ～ R7.3.2	61	23,554	―	96.1%
〈若きポーランド〉―色彩と魂の詩 1890-1918	R7.3.25 ～ R7.3.31 （R7.6.29）	6 （85）	2,099 （35,650）	クラクフ国立博物館、NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿、京都新聞	―
合　計		238	120,008		93.8%

注　（　）内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「没後100年 富岡鉄斎」会場風景
撮影：河田憲政

「LOVEファッション―私を着がえるとき」会場風景
撮影：浅野 豪

国立西洋美術館

「内藤コレクション　写本 ― いとも優雅なる中世の小宇宙」は、国立西洋美術館が所蔵する写本コレクション「内藤コレクション」を一堂に展示したものであり、カタログ・レゾネの刊行と連携させた企画として実施した。そのため最新の研究成果を活用することができた。写本という芸術ジャンルについて、その機能も含めた解説を加えることにより、この芸術ジャンルの魅力を広めることができたと考える。国立西洋美術館は中世から20世紀前半に至る西洋美術の流れを体系的・通史的に概観できる施設を目指しており、中世からルネサンスにかけて数多く制作された写本芸術の理解を広めるうえで、本展覧会はきわめて大きな意義を持ったといえる。本展覧会が成功を収めたことは目標の約1.5倍にのぼる入館者数が物語る通りである。

「モネ 睡蓮のとき」では、クロード・モネ晩年の芸術に焦点を当て、とりわけ「大装飾画」の連作に関連する〈睡蓮〉を中心に、その展開を精緻に跡付けつつ、モネ晩年の造形表現の革新性と多様性、画家の個人史および社会史的な背景にも光をあてた。また、国立西洋美術館のコレクションの多くは、松方コレクションに由来するモネ晩年の作品が多数含まれるが、本展覧会は、それらの作品と密接な関連性をもつ同時期の作例とを比較展示することで、モネの画業における位置付けを再検証・再認識する機会ともなった。会場では一般来館者向けに平易な解説を付し、来館者アンケートでも高い評価を得た。一方、図録では、作品の政治的コンテクストや美術市場との関係、日本との文化交流史、素材と技法をめぐる科学分析など、多角的な観点から国内外の研究者による充実した論考を収録し、高い学術性を確保した。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？ ―― 国立西洋美術館65年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ	(R6.3.12) R6.4.1 ～ R6.5.12	37 (56)	37,673 (54,663)	―	76.1%
内藤コレクション 写本 ― いとも優雅なる中世の小宇宙	R6.6.11 ～ R6.8.25	67	80,084	朝日新聞社	91.5%
モネ 睡蓮のとき	R6.10.5 ～ R7.2.11	108	807,566	マルモッタン・モネ美術館、日本テレビ放送網、読売新聞社、BS日テレ	88.1%
西洋絵画、どこから見るか？ ―ルネサンスから印象派まで サンディエゴ美術館 vs 国立西洋美術館	R7.3.11 ～ R7.3.31 (R7.6.8)	19 (79)	50,431 (222,565)	サンディエゴ美術館、日本経済新聞社、TBS、TBSグロウディア、テレビ東京	―
合　計		231	975,754		87.3%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「内藤コレクション　写本 ― いとも優雅なる中世の小宇宙」会場風景
撮影：上野則宏

「モネ 睡蓮のとき」会場風景
撮影：上野則宏

国立国際美術館

「梅津庸一 クリスタルパレス」は美術家梅津庸一のこれまでのあゆみを振り返る大規模な個展でありながら、作家の仕事をとおして、美術館という場の可能性と限界を浮かび上がらせることを主たる目的として開催された。大量の出品作品、作品と展示空間とが渾然となる会場施工、出入口が一体化した回遊形式の動線などは、まだ若い梅津の、今後の展開への余白を確保しておくための戦略であるが、展示室ごとに雰囲気を変える会場構成は視覚的にも楽しく、硬軟織り交ぜながら多様な問いを来館者に投げかけるものとなった。会期中には、アーティスト・トーク、ギャラリー・トークに加え、計５本の対談を実施。対談相手は企画担当者に加え、現代美術を専門とする美術史家、ビジュアル系音楽に精通するフリーライター、哲学者などと幅広く、通常の現代美術展では扱いにくいテーマにも果敢に踏み込んだ点が特徴的であった。この作家の多面的な性格を、単純化することなく捉えるためのヒントを与える機会になったと考えられる。

「ノー・バウンダリーズ」は、国立国際美術館の所蔵作品を活用した展覧会として企画、開催した。現代社会において概念化されている「境界」をテーマに取り上げ、国内外で活躍する現代美術作家が作品を通じていかに既成概念を超え、多様性や共生の価値を新たに提示しているかを示した。これは同時に、現代美術がいかに現代社会の課題に対する方策を提示し得るかを探る試みでもある。出展作品には、映像、写真、インスタレーションといった表現方法を多く含むことにより、最先端の現代美術の動向を示すことも出来た。また展覧会を構成する所蔵作家、作品による地域性やジェンダーに対する問題意識のあり方からも、当館の収蔵方針として近年注力しているこれら要素が、かなり充実していることを確認することができた。同じく企画展「線表現の可能性」ともども所蔵作品を活用した企画・実施であったが、コレクション形成の更なる発展が進む上で、こうした新たな切り口によるテーマ展の開催が今後の事業プログラムの重要な柱の一つとなりうることが確認できた。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
古代メキシコ ―マヤ、アステカ、テオティワカン	(R6.2.6) R6.4.1 ～ R6.5.6	32 (80)	69,329 (137,585)	NHK大阪放送局、 NHKエンタープライズ近畿、 朝日新聞社	98.8%
梅津庸一 クリスタルパレス	R6.6.4 ～ R6.10.6	107	23,915	―	78.9%
線表現の可能性	R6.11.2 ～ R7.1.26	67	20,938	―	82.3%
ノー・バウンダリーズ	R7.2.22 ～ R7.3.31 (R7.6.1)	32 (86)	10,185 (24,976)	―	―
合　計		238	124,367		96.9%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「梅津庸一 クリスタルパレス」会場風景
撮影：福永一夫

「ノー・バウンダリーズ」会場風景
撮影：福永一夫

国立新美術館

「田名網敬一　記憶の冒険」は、田名網敬一の作品を全11章の時系列構成で紹介した回顧展であり、網羅的な展示構成により、田名網の創作活動を包括的に知ることのできる貴重な機会となった。また、香港のM＋、アメリカのMoMAとウォーカーアートセンターの３館に所蔵されている田名網のコラージュ作品を本展のために借用することができたことで、海外での受容と評価の一端を示すことにも成功した。晩年にかけて多岐にわたるメディアを使用して横断的に制作を続けた田名網の作品を時系列で見せることで、学術的な観点での作品分析の俎上に乗せる契機ともなった。戦争をテーマにした作品が多いが、結果的には鮮やかな色彩とポップなイラストの作風、没入的な展示方法によって幅広い来館者層が楽しめる空間を創出することができた。

「荒川ナッシュ医 ペインティングス・アー・ポップスターズ」は、アメリカ在住のパフォーマンス・アーティスト、荒川ナッシュ医によるアジア圏の美術館では初となる個展であるとともに、国立新美術館にとって初めてのパフォーマンス・アーティストの個展であり、彼の全方位の活動を検証する新しい形式の展覧会であった。荒川は、敬愛する画家たちの絵画を核として、子育て、LGBTQUIA、いわき、音楽、パスポートなどの９つのセクションにより、東日本大震災の経験や、日本から米国に変えた国籍の問題などアイデンティティに関わる課題、ジェンダーやディアスポラなど世界中で議論されている諸問題を、美術の歴史も織り込みながら等身大で構成した。また絵画に触発されて、65歳以上のシニアやこどもたちとのパフォーマンスも実施するなど、来館者が楽しみながら参加できる機会と社会問題の検証を取り込んだ本展は、展覧会の在り方についても新たな視点を示すことができた。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
マティス 自由なフォルム	(R6.2.14) R6.4.1 ～ R6.5.27	50 (91)	157,931 (262,734)	ニース市マティス美術館、 読売新聞社、 日本テレビ放送網	94.6%
遠距離現在 Universal / Remote	(R6.3.6) R6.4.1 ～ R6.6.3	56 (79)	26,958 (34,979)	―	88.7%
CLAMP展	R6.7.3 ～ R6.9.23	72	248,005	CLAMP展製作委員会	95.7%
田名網敬一 記憶の冒険	R6.8.7 ～ R6.11.11	84	88,274	朝日新聞社、独立行政法人 日本芸術文化振興会、 文化庁	97.4%
荒川ナッシュ医 ペインティングス・ アー・ポップスターズ	R6.10.30 ～ R6.12.16	42	43,683	―	82.9%
リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s	R7.3.19 ～ R7.3.31 (R7.6.30)	12 (91)	16,895 (138,432)	東京新聞、独立行政法人 日本芸術文化振興会、 文化庁	―
合　計		316	581,746		93.8%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「田名網敬一 記憶の冒険」会場風景
撮影：上野則宏

「荒川ナッシュ医 ペインティングス・アー・ポップスターズ」会場風景
撮影：中川周

3―3　映画上映等

国立映画アーカイブ

上映会は長瀬記念ホールOZUで10企画、小ホールで１企画の計11企画を実施した。そのうち特色あるものとして、「没後50年 映画監督 田坂具隆」では、1920年代から1960年代にかけて、誠実かつヒューマニズムに満ちた作風で多くの名作を残した映画監督田坂具隆（1902-1974）の『更生』（1927年）から遺作『スクラップ集団』（1968年）まで、現存するすべての田坂作品を集めるとともに、ゆかりの人々の作品も含め、41作品（32プログラム）を上映する大規模な企画となり、同名の展覧会とともにその偉大な業績を多面的に検証する貴重な機会となった。

展示企画としては、３つの企画展を開催した。とりわけ「日本映画と音楽 1950年代から1960年代の作曲家たち」では、撮影所システムのもと各社がとりわけ映画を量産していた時代に映画界で活躍した作曲家たちを取り上げ、自筆譜や製作資料などの資料のほか実際の楽曲を通じてその功績を顕彰した。また、展覧会と連動して大規模な特集上映企画も開催し、日本映画と音楽家たちとの緊密な関わりについて、直接的かつ多面的に提示した。さらに５月25日には、開館以来初となる演奏会「映画音楽がやってきた！『日本映画と音楽』特別演奏会」を長瀬記念ホールOZUにて催し、映画ファンを超えた幅広い層に国立映画アーカイブの活動を認知させることができた。また「映画監督 アンジェイ・ワイダ」はポーランドの関係機関との連動により、斬新な展示空間の設計のもとで巨匠の作家像を浮かび上がらせることができた。

上映会

タイトル	会　期	上映日数	上映回数	入館者数	共 催 者	満足度
長瀬記念ホール OZU						
生誕100年 高峰秀子	R6.4.9 ～ R6.5.5	24	54	8,694	―	96.8%
サイレントシネマ・デイズ 2024	R6.5.14 ～ R6.5.19	6	12	1,492	―	75.8%
日本映画と音楽 1950年代から1960年代の作曲家たち	R6.5.25 ～ R6.7.28	56	129	15,982	―	95.4%
返還映画コレクション(2) ―第一次／二次・劇映画篇	R6.7.30 ～ R6.8.23	22	49	6,492	―	94.4%
第46回ぴあフィルムフェスティバル 2024	R6.9.7 ～ R6.9.21	13	52	5,017	一般社団法人PFF、公益財団法人川喜多記念映画文化財団、公益財団法人ユニジャパン	95.8%
没後50年 映画監督 田坂具隆	R6.10.8 ～ R6.10.20 R6.11.5 ～ R6.11.24	30	68	9,578	―	91.4%
TIFF/NFAJ クラシックス 映画監督 吉田喜重	R6.10.29～ R6.11.3	6	12	999	東京国際映画祭	81.3%
映画監督 アンジェイ・ワイダ	R6.12.10～ R6.12.26	15	30	4,483	アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュート	92.0%
メキシコ映画の大回顧	R7.1.7 ～ R7.2.9	30	60	7,360	メキシコ国立自治大学（UNAM）フィルモテカ、メキシコ・シネテカ・ナシオナル、メキシコ映画機構(IMCINE)	96.0%
日本の女性映画人(3) ―1990年代	R7.2.11 ～ R7.3.23	36	75	6,713	―	97.6%
小ホール						
NFAJコレクション 2025 春 ――横浜と映画	R7.3.7 ～ R7.3.23	9	18	2,349	―	94.6%
合　計		247	559	69,159		93.9%

展覧会

展覧会名	会　期	日　数	入館者数	共 催 者	満足度
日本映画と音楽　1950年代から1960年代の作曲家たち	R6.4.9　～　R6.8.23 ※R6.5.7　～　R6.5.12休室	112	7,492	ー	92.5%
没後50年 映画監督 田坂具隆	R6.9.7　～　R6.11.24	68	3,690	ー	95.7%
映画監督 アンジェイ・ワイダ	R6.12.10　～　R7.3.23 ※R6.12.27 ～　R7.1.6休室	81	5,232	日本美術技術博物館 Manggha、アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュート	91.3%
合　計		261	16,414		92.8%

上映会

〈長瀬記念ホール OZU〉

『更生』(1927年、田坂具隆監督)(「没後50年 映画監督 田坂具隆」より)

〈小ホール〉

『港の日本娘』(1933年、清水宏監督)(「NFAJコレクション 2025 春――横浜と映画」より)

展覧会

展覧会「日本映画と音楽 1950年代から1960年代の作曲家たち」会場風景

展覧会「NFAJコレクションでみる 日本映画の歴史」会場風景

3―4　巡回展

国立美術館の所蔵作品を効果的に活用し、地方における鑑賞機会の充実及び美術の普及を図るとともに全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資するため、全国の公私立美術館等と連携して、国立美術館巡回展を実施した。

また、国立映画アーカイブにおいて、「優秀映画鑑賞推進事業」を全国各地で実施した。

さらに、国立アートリサーチセンターにおいては、全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資する取組として、(1) 国立美術館全館と、地方の美術館１館とが協働し、両者のコレクションを特定のテーマのもとに企画構成した展覧会「国立美術館 コレクション・ダイアローグ」、(2) 地方の美術館のコレクション展示に、関連する国立美術館コレクションを１点ないし数点加えることで、地方美術館のコレクションの魅力を引き出す特集展示「国立美術館 コレクション・プラス」の２つの事業を開始し、(1) については令和７年度の実施に向けて、国立工芸館と岐阜県美術館との間で準備を進めた。(2) については、令和６年度は栃木県立美術館で「コレクション展Ⅲ　刑部人とギュスターヴ・クールベ　風景画家たちの眼」を実施し、同館の所蔵する刑部人の作品に国立西洋美術館の所蔵するクールベの作品を加えて比較展示を行った。

国立美術館巡回展

企画館	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数	満足度
京都国立近代美術館	写真をめぐる100年のものがたり 京都国立近代美術館コレクションを中心に	静岡市美術館	39	7,437	68.6%
	超絶技巧からモダンへ 京都・近代工芸の新展開	長崎県美術館	55	7,794	80.7%
	合　計		94	15,231	74.7%

「写真をめぐる100年のものがたり　京都国立近代美術館コレクションを中心に」会場風景

「超絶技巧からモダンへ　京都・近代工芸の新展開」会場風景

優秀映画鑑賞推進事業（国立映画アーカイブ）

映画文化や映画芸術への関心を高め、映画フィルム保存の重要性について理解を促進することを目的に、文化庁、教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して、全国各地で映画の巡回上映を行った。

展覧会名	会場数	開催日数	入館者数	満足度
令和６年度優秀映画鑑賞推進事業	97会場	183（延べ日数）	24,542	91.0%

下関市民会館（ 山口県）　実施会場風景

令和6年度優秀映画鑑賞推進事業
鑑賞の手引

国立映画アーカイブの巡回上映・展示

タイトル	会場数	開催日数	入館者数	満足度
Comic Legacies on the Japanese Silver Screen （日本映画における喜劇の遺産）[会場：イェール大学（米国）]	1	3	191	―
Kenji Misumi（三隅研次監督特集） [会場：シネマテーク・フランセーズ（フランス）]	1	32	10,012	―
Hiroshi Shimizu（映画監督：清水宏） [会場：映像美術館（MoMI）ジャパン・ソサエティ他1会場（米国）]	3	42	3,727	―
MoMAK Films 2024[会場：京都国立近代美術館]	1	8	418	94.1%
こども映画館　スクリーンで見る日本アニメーション！[国内6会場]	6	13	852	―
メキシコ映画の大回顧①[会場：福岡市総合図書館]	1	18	832	―
メキシコ映画の大回顧②[会場：京都府京都文化博物館]	1	11	1,098	―
第27回中之島映像劇場「1970年」[会場：国立国際美術館]	1	1	195	100.0%
合　計	15	128	17,325	97.1%

シネマテーク・フランセーズ「三隅研次監督特集」会場風景

ジャパン・ソサエティ「映画監督：清水宏」会場風景

3―5　美術創造活動の活性化の推進

国立新美術館では、我が国の美術創造活動の活性化を推進するため、全国的な活動を行う美術団体等に展示室を提供するとともに、美術団体等から寄せられた要望等を参考に広報支援も実施している。令和６年度の展示室の予約率は100%となり、目標を達成した。また、公募展と国立新美術館が開催する企画展との観覧料相互割引を実施するなど連携協力した取組を行った。

館　　名	団体数	入館者数
国立新美術館	83団体	1,000,061人

【注１】　団体数は令和６年４月１日時点のもの。
【注２】　展示の会期が年度を跨ぐ場合、当該年度（令和６年４月１日～令和７年３月31日）の入館者数を記載。

また、マンガ・アニメ分野の作家の個展を実施するなど新たな分野の動向を積極的に紹介する取組を進めたほか、国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供に関しては、特に荒川ナッシュ医による個展において、他作家との協働によるパフォーマンスを通じて、現代芸術の主体性と表現手法の再考を促すなど、先進的な取組がなされたと言える。そのほか、「NACT View」シリーズの継続実施により、若手作家への継続的な発表機会の確保にもつなげた。

現代作家を採り上げた展覧会名	会　　期
遠距離現在 Universal / Remote	R6.3.6　～　R6.6.3
CLAMP展	R6.7.3　～　R6.9.23
田名網敬一 記憶の冒険	R6.8.7　～　R6.11.11
荒川ナッシュ医 ペインティングス・アー・ポップスターズ	R6.10.30　～　R6.12.16
NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT※	R6.1.24　～　R6.6.10
六本木アートナイト2024※	R6.9.27　～　R6.9.29

※パブリックスペースで展示

第98回　国展

第75回　毎日書道展

「荒川ナッシュ医 ペインティングス・アー・ポップスターズ」
会場風景
撮影：中川周

「NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT」会場風景
撮影：表恒匡

4

美術情報の収集・発信活動

4—1　情報資源発信に向けた取組

国立アートリサーチセンターにおいて「全国美術館収蔵品サーチ（SHŪZŌ）」や「メディア芸術データベース」を運営し、国内美術館や関係機関と連携し、国内美術館所蔵作品等情報の集約・発信に努めた。

国立美術館の情報発信については、ホームページにおいて、引き続き展覧会情報や調査研究成果などの公表を積極的に実施するとともに、所蔵作品等のデジタル化・データベース化を進め、国立アートリサーチセンターを中心に「所蔵作品総合検索システム」に収録する収蔵作品の著作権調査等を行い、同システムの収録画像の充実を図り、国立美術館コレクションの周知に努めた。さらに、現代美術やメディア芸術の国際展等へ出展・参加する作家等に対する支援等を通じて、日本の現代美術やメディア芸術を多様な国際文脈の中に位置づけ、表現の多様性や社会的メッセージ性を国際社会に発信した。また、戦後日本美術の重要文献の翻訳と公開の実践により、グローバルな視点で再評価するための知的基盤を提供した。

全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」

メディア芸術データベース

全国美術館収蔵品サーチ（SHŪZŌ）登録件数

新規登録館数	本年度登録館累計（館）
14	212

新規登録件数	本年度登録累計（件）
156,535	443,842

メディア芸術データベース登録件数

新規登録件数	本年度登録累計
164,542	1,234,328

ホームページアクセス件数

館　　名	アクセス件数（ページビュー）
本部	735,328
国立アートリサーチセンター	237,797
東京国立近代美術館（国立工芸館含む）	7,652,594
京都国立近代美術館	2,835,415
国立映画アーカイブ	2,092,729
国立西洋美術館	9,208,899
国立国際美術館	2,132,873
国立新美術館	11,393,214
合　計	36,288,849

所蔵作品データ等のデジタル化

館　　名	画像データ				テキストデータ			
	デジタル化件数		累計公開件数	公開率	デジタル化件数		累計公開件数	公開率
	新規	累計			新規	累計		
東京国立近代美術館	165	12,077	8,310	59.6%	149	12,575	12,551	89.9%
国立工芸館	92	5,250	4,471	105.0%※1	85	5,434	5,173	121.5%※1
京都国立近代美術館	451	9,947	9,947	72.0%	281	16,098	16,098	116.5%※1
国立映画アーカイブ	—	—	—	—	8,095	314,385	—	—
国立西洋美術館	22	4,714	4,714	70.5%	22	5,151	5,151	77.1%
国立国際美術館	135	9,019	5,159	62.6%	82	9,749	8,808	106.9%※1
合　計	865	41,007	32,601	69.4%	8,714	363,392	47,781	101.8%

【注1】「デジタル化件数」は、各館のローカルシステムにおける画像及びテキストデータの登録件数である（国立映画アーカイブについては、ローカルシステムであるNFADへの映画フィルム及び映画関連資料のテキストデータ登録件数を掲載している）。

【注2】「累計公開件数」は、「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」（https://search.artmuseums.go.jp/）における画像及びテキストデータの公開件数である。

【注3】上表のほか、東京国立近代美術館ではホームページ内「作品検索」（https://www.momat.go.jp/collection）において作品のテキストデータ12,395件及び画像データ11,571件、国立工芸館ではホームページ内「作品検索」（https://www.momat.go.jp/craft-museum/collection）において作品のテキストデータ5,261件及び画像データ5,127件、京都国立近代美術館では「京都国立近代美術館収蔵品データベース」（https://jmapps.ne.jp/momak/）において作品のテキストデータ16,098件及び画像データ14,722件、国立映画アーカイブでは「国立映画アーカイブ所蔵映画フィルム検索システム」（https://nfad.nfaj.go.jp/）において日本劇映画のテキストデータ8,207件、国立西洋美術館では「国立西洋美術館所蔵作品データベース」（https://collection.nmwa.go.jp/artizeweb/）において作品のテキストデータ6,684件及び画像データ7,746件、国立新美術館では「ANZAÏ フォトアーカイブ」（https://www.nact.jp/anzai/index.php）においてアーカイブズ資料のテキストデータ3,217件を公開している。

※1　国立工芸館、京都国立近代美術館、国立国際美術館では、複数で一揃いの作品を個別に掲載している場合等があるため、テキストデータの公開率が高くなっている。

4―2　美術情報・資料の収集及び情報サービスの提供

館　　名	収集件数	累計件数	利用者数	図書室等のオンライン利用数（件）
東京国立近代美術館	3,046	163,957	4,233	1,874,055
国立工芸館	2,268	37,399	1,022	564,608
京都国立近代美術館	832	38,179	1	244,267
国立映画アーカイブ	1,325	56,228	2,024	1,612,794
国立西洋美術館	1,412	56,771	174	440,748
国立国際美術館	1,283	60,383	13	146,807
国立新美術館	2,520	170,540	35,395	1,798,651
合　計	12,686	583,457	42,862	6,681,930

【注1】上記の図書室等のほか、東京国立近代美術館は本館４階、京都国立近代美術館は４階、国立西洋美術館は１階、国立国際美術館は地下１階に図録等を閲覧できる情報コーナーを設けている。

【注2】平成30年11月３日より京都国立近代美術館及び国立国際美術館では事前予約制による資料閲覧を開始したため、予約閲覧利用者数を「図書室等利用者数」の欄に記載している。

【注3】「図書室のオンライン利用者数」は蔵書検索（OPAC）のアクセス数又は検索数、リポジトリ閲覧件数、パスファインダー閲覧数のうち該当するものの合計値である。

東京国立近代美術館　アートライブラリ
撮影：上野則宏

国立工芸館　アートライブラリ

国立映画アーカイブ　図書室

国立西洋美術館　研究資料センター

国立国際美術館　情報コーナー

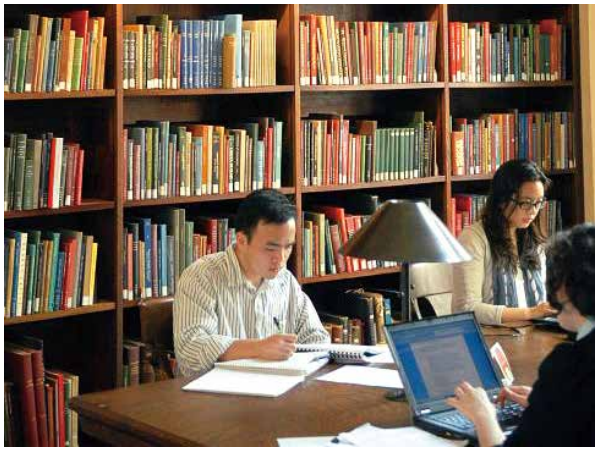
国立新美術館　アートライブラリー

JACプロジェクト

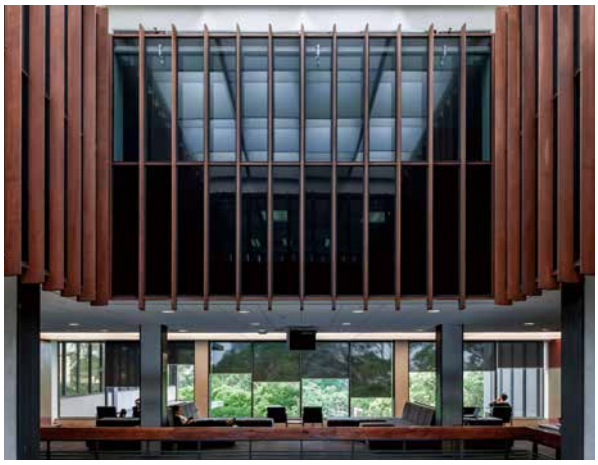
国立新美術館では、海外では入手が困難な日本の展覧会カタログを海外の日本美術研究の拠点に寄贈するJAC（Japan Art Catalog）プロジェクトを実施し、日本の美術館による研究成果を発信した。また、JACプロジェクトに加えて、ハイデルベルク大学CATS図書館に38冊の資料を寄贈した。

寄贈（JACプロジェクト）	
寄贈先	寄贈資料（冊）
フリーア美術館　アーサー・M・サックラー美術館図書館（スミソニアン研究所）（米国）	209
コロンビア大学　エイヴリー建築・美術図書館（米国）	108
ライデン大学　アジア図書館（オランダ）	472
シドニー大学　フィッシャー図書館（オーストラリア）	178
合　計	967

フリーア美術館　アーサー・M・サックラー美術館図書館


コロンビア大学　エイヴリー建築・美術図書館

ライデン大学　アジア図書館


シドニー大学　フィッシャー図書館

4―3　我が国現代美術やメディア芸術の国際発信の推進、現代作家の国際発信支援等

令和６年度はⅠ期４国際展、Ⅱ期２国際展の計６国際展（のべ28アーティスト）を採択し、支援を継続している。「アルル国際写真フェスティバル2024」では、日本の現代写真を特集する３展のうち東日本大震災を扱った企画（フィリップ・セクレア、天田万里奈共同キュレーション）を支援し、「ハワイ・トリエンナーレ2025」ではオアフ島以外にも会場が拡大され、各地で日本人作家の作品が紹介された。その他、沖縄出身のアーティストらが参加した「2024釜山ビエンナーレ」、環境問題や異種コミュニケーションの可能性を問う作家が取り上げられた「バンコク・アート・ビエンナーレ2024」、アジア太平洋地域で最も影響力のある「第11回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（オーストラリア、ブリスベン）、詩人や音楽家を含め幅広いジャンルのアーティストが参加する「アジア・トリエンナーレ・マンチェスター2025」など、多様性に富む世界各地の国際展の支援を実現した。

また、戦後日本現代美術に関する未英訳文献のうち、テーマや時代に基づき文化庁アートプラットフォーム事業で選定された11件を翻訳し、オンライン公開可能な形式に整えた。文献は美術評論、アーティストのエッセイ、対談、インタビューなど多岐にわたり、戦後日本現代美術における思想や実践を海外に発信するための基盤づくりを行った。

アーティストの国際発信支援プログラム採択国際展より：
上段左から寺内曜子（釜山ビエンナーレ）、AKI INOMATA（バンコク・アート・ビエンナーレ）、バグース・バンデガ & 今津景（バンコク・アート・ビエンナーレ ）
下段左から小野規（アルル国際写真フェスティバル）、石川真生（釜山ビエンナーレ）

アーティストの国際発信支援プログラム採択国際展より：
上段左から山下麻衣＋小林直人（バンコク・アート・ビエンナーレ2024）、潘逸舟（第11回アジア・パシフィック・トリエンナーレ）
下段左からミヤギフトシ（2024釜山ビエンナーレ）、志賀理江子（アルル国際写真フェスティバル2024）

翻訳成果物を用いたシンポジウムの様子（米国カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校）

翻訳成果物を用いたシンポジウムの様子（英国オックスフォード大学歴史学部）

5 教育普及活動

5—1　幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）及びラーニングコンテンツ等の開発

各館において教育普及・鑑賞促進に向けた多様なプログラムを展開し、世代や背景を問わず幅広い層の美術鑑賞に対する関心を高める成果を上げた。東京国立近代美術館では新たに建物や沿革に目を向けたツアーを実施したほか、国立新美術館ではアーティストとの協働を通じて創造的体験が提供されるなど意欲的な取組が行われた。令和６年度は、各館のこども向け事業に対し、Adobe Foundationから支援を受けたことにより、「子どもたちと美術館を繋ぐプロジェクト（Connecting Children with Museums）」をコンセプトに、法人全体でこども・子育て支援のプログラムの充実に努めることができた。

また、国立アートリサーチセンターでは、eラーニング講座「ミュージアム・アクセシビリティ講座　ふかふかTV」やソーシャルストーリー制作支援を通じて、美術館のアクセシビリティ向上に寄与し、特に「ふかふかTV」については受講者が1,500名を超え、多くの人々に実践的な知識を提供した取組といえる。これらの取組を通して、教育・福祉・文化分野を横断し、美術館の社会的包摂機能の強化に大きく貢献した。

館　　名	講演会等事業実施回数	参加者数	満足度
東京国立近代美術館	524	8,409	93%
国立工芸館	113	3,910	93%
京都国立近代美術館	88	3,266	91%
国立映画アーカイブ	166	12,042	91%
国立西洋美術館	279	9,066	95%
国立国際美術館	176	5,807	100%
国立新美術館	103	10,465	96%
合　計	1,449	52,965	94%

注　満足度調査実績は、「良い」「普通」「悪い」のうち「良い」と回答した者の割合である。

5—2　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等

ボランティアとの協力等に関しては、各館においてボランティアスタッフ養成研修を実施するなど、体制整備に努めているほか、ボランティアスタッフが主体となって直接事業を実施することや館の事業をサポートすること等によって、ボランティアスタッフ自身の資質向上や将来の美術館を支える市民の育成にもつなげている。

また、企業や地域との連携については、国立アートリサーチセンターにおいて、共生社会の実現に向け、認知症や孤立といった課題にアートを通じてアプローチする共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点（略称：ART共創拠点）に参画し、自治体・大学等と連携して研究を進めた。展覧会やワークショップ、プレ万博事業への出展を通じて文化的処方の社会的認知を高めたほか、ウェブサイトやガイドブックにより情報発信を行い、福祉・医療・文化の連携促進と社会への波及効果を生み出した。

館　　名	ボランティア登録者数	ボランティア参加者数（延べ人数）	事業参加者数
東京国立近代美術館	49	944	5,622
国立工芸館	35	103	683
京都国立近代美術館	15	—	—
国立西洋美術館	51	820	5,389
国立国際美術館	14	28	571
国立新美術館	61	104	2,185
合　計	225	1,999	14,450

注　京都国立近代美術館ではボランティアによる事業を実施していないためボランティア登録者数のみを記載している。

京都国立近代美術館「びじゅつかんのお仕事たいけん!」実施風景
撮影：衣笠名津美

国立映画アーカイブ「こども映画館　2024年の夏休み★」

国立西洋美術館 ボランティア・スタッフによる「ファミリー・プログラム　どようびじゅつ」

国立国際美術館「特別対談　梅津庸一×浅田彰」会場風景

国立新美術館「かようびじゅつかん」

東京国立近代美術館「Let's Talk Art!」の様子
撮影：落合由利子

国立工芸館「バッジ&ウォッチ」ワークショップ風景（2025年3月23日）
撮影：haruharehinata

国立新美術館 サポート・スタッフの活動

6 調査研究活動

6—1　調査研究一覧

館　　名	調査研究件数
国立アートリサーチセンター	22
東京国立近代美術館	16
国立工芸館	13
京都国立近代美術館	15
国立映画アーカイブ	17
国立西洋美術館	22
国立国際美術館	23
国立新美術館	15
合　計	143

科学研究費補助金を受けた調査研究

館　　名	タイトル	氏名（職名）
東京国立近代美術館 （国立アートリサーチセンター）	1920-50年代のデザイン／工芸の実践に関する基礎的研究	中尾優衣 （主任研究員）
東京国立近代美術館 （国立工芸館）	近代日本における中国陶磁研究への新たな視座—小森忍の活動を通して	宮川典子 （任期付研究員）
東京国立近代美術館 （国立映画アーカイブ）	ナショナル・フィルモグラフィ構築に向けた調査研究： 塚田嘉信コレクションを活用して	入江良郎 （主任研究員）
京都国立近代美術館	20世紀後半の現代陶芸の動向についての基礎的研究	宮川智美 （任期付研究員）
国立西洋美術館	美術作品や歴史資料中の膠着材の同定法の構築 —方法の改善・発展と実践	髙嶋美穂 （特定研究員）
国立西洋美術館	「装飾的」なる概念を介した19世紀末美術と演劇の連動 —ナビ派と芸術座を中心に	袴田紘代 （主任研究員）
国立西洋美術館	来歴の解明と文化財返還問題の国際的文脈からの松方コレクションの 包括的研究	陳岡めぐみ （主任研究員）
国立国際美術館	現代美術に関する収集アーカイブズ構築と公開の為の方法論策定： 画廊旧蔵資料調査から	児玉茜 （特定研究員）

注　法人所属研究員が研究代表者として行った研究のみ掲載。

6―2　調査研究成果の発信

展覧会図録等における発表等

館　　名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	パンフレット・ガイド等
国立アートリサーチセンター	0	1	0	6
東京国立近代美術館	3	1	2	3
国立工芸館	1			8
京都国立近代美術館	5	0	7	3
国立映画アーカイブ	0	0	4	25
国立西洋美術館	3	1	3	7
国立国際美術館	3	0	4	5
国立新美術館	4	1	―	4
合　計	19	4	20	61

注　「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、こども向けの鑑賞ガイド等が含まれる。

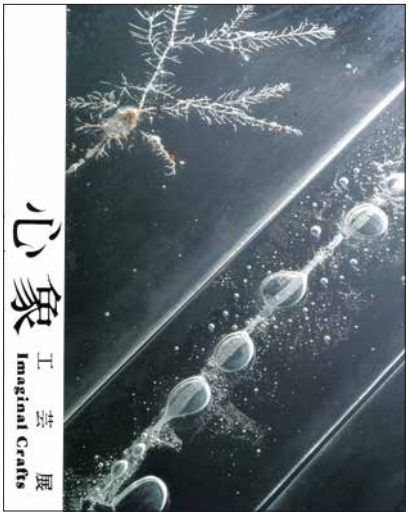
学会における発表等

館　　名	学会等発表	論文等掲載
国立アートリサーチセンター	29	20
東京国立近代美術館	42	73
国立工芸館	11	33
京都国立近代美術館	19	26
国立映画アーカイブ	35	41
国立西洋美術館	10	25
国立国際美術館	9	25
国立新美術館	3	15
合　計	158	258

注　当法人以外が発行の学術雑誌等・学会等に限る。

館ニュース・パンフレット・ガイド等

東京国立近代美術館「ハニワと土偶の近代」
NHKジュニアガイド



国立工芸館「心象工芸展」図録

京都国立近代美術館「生誕120年 人間国宝 黒田辰秋―木と漆と螺鈿の旅―」図録

国立映画アーカイブ「NFAJニューズレター」第24号

国立西洋美術館ニュース「ゼフュロス」第90号

国立国際美術館『梅津庸一 クリスタルパレス』図録

『国立新美術館　施設ガイド　建物がおしごと中！』

国立アートリサーチセンター ガイドブック「文化的処方のはじめの一歩」

7 コレクションの形成・活用・継承

7—1　作品の収集

国立美術館の役割を踏まえた質の高いナショナルコレクションの形成を図るため、法人全体の作品収集方針等に基づき、体系的・通史的にバランスの取れた所蔵作品の充実に努めた。また、令和６年度も、法人予算の重点配分により現代作品の同時代収集を進めた。

作品の収集については、購入以外にも大型コレクションの一括寄贈の受入など寄贈による収集も国立美術館の特徴であり、購入、寄贈を通じてコレクションの充実を図ることができている。

美術史的価値の高い作品や海外流出のおそれがある重要作家の作品収集、ジェンダー・バランスや地域の多様性に配慮した収集に努め、国際的に質の高いナショナルコレクションの形成を推進した。

収集点数一覧

館　　名	購入点数	購入金額(円)	寄贈点数	年度末 所蔵作品数	年度末 寄託作品数
東京国立近代美術館	78	1,183,779,718	114	13,954	247
国立工芸館	40	166,272,000	60	4,259	139
京都国立近代美術館	70	338,616,560	212	13,813	1,598
国立西洋美術館	60	1,383,568,720	167	6,683	96
国立国際美術館	29	535,253,918	9	8,241	62
合　計	277	3,607,490,916	562	46,950	2,142

映画フィルム

館　　名	購入本数	購入金額(円)	寄贈本数	年度末 所蔵本数	年度末 寄託品本数
国立映画アーカイブ	99	124,001,412	2,777	90,126	19,322

東京国立近代美術館

〈購入〉

横山大観の初期代表作《迷児》(1902年)、韓国の抽象表現を牽引した朴栖甫の《描法 No.2-74》(1974年)、イタリアの彫刻家メダルド・ロッソの最重要作《Ecce Puer(この少年を見よ)》(1920-25年頃)を購入した。いずれも国立美術館全体のコレクションのなかで多様な活用が見込まれる優品である。また日本画では、画家のキャリア全盛期に制作された甲斐庄楠音《白百合と女》(1920年)、油彩では、日本のポップ・アートを代表するタイガー立石(立石紘一・立石大河亞)による《Mao's Ecstasy》(1970年)の購入が大きな成果である。近年重点的に取り組む女性作家の作品の充実として、彫刻では多田美波、寺内曜子、豊嶋康子、白井美穂、版画では嶋田美子、写真では石川真生など、多様な時代とジャンルの作品を購入し、着実な成果をあげた。同じく近年計画的に取り組む地域的多様性への配慮として、朴栖甫に加えて、韓国実験美術の重要作家ソン・ヌンギョンの写真作品を購入したほか、石川真生、真喜志勉という戦後の沖縄の美術を代表する作家の作品を購入できたことも大きな前進である。

〈寄贈〉

日本画では、長く寄託としてお預かりしてきた、日展日本画を代表する作家の一人・杉山寧《コレー》(1964年)をご寄贈いただいた。小振りながら画業ピークの時期に当たる良品であり、すでに所蔵する杉山の作品と共に活用が見込まれる。油彩では、もの派の代表的作家・李禹煥の近作《応答》(2022年)を、作家本人よりご寄贈いただいた。コレクションに欠けていた時代の作品であり、より十全に作家のキャリア全体を通覧することが可能となった。また福田豊四郎、野見山暁治、山口華楊それぞれによる素描をご寄贈いただいたが、いずれも当館がすでに所蔵している作品の準備段階で制作されたものである。完成作と共に活用することで、より充実した展観が可能となった。資料として受け入れたジャン(ハンス)・アルプの石膏11点は、アルプ財団よりご寄贈いただいたもので、ブロンズや石彫制作の過程で作られた石膏複製である。作家の制作プロセスを明らかにする重要な資料であると共に、将来的な国際的共同リサーチを前提とした寄贈ということからも意義深い。

横山大観《迷児》1902年

多田美波《周波数 37303030MC》1963年
撮影:上野則宏

国立工芸館

〈購入〉

北大路魯山人《織部蟹絵丸平向付》(1957年) と金森宗七《花鳥文様象耳付大花瓶》(1892年頃) を購入した。北大路魯山人晩年の代表作といえる向付と、明治時代の日本の工芸技術の粋を示す優品を収蔵できたことで、国立工芸館のコレクションの欠落を補い、また作品の海外流出を防いだという点でも国立の美術館としての役割を果たした意義のある購入であった。

加えて二十代堆朱楊成、稲木東千里、木村芳郎、中田真裕、佐々木類など幅広い年代にわたり近現代工芸の多彩な様相を示す作品を幅広く収集することができた。さらに特筆すべき点として、「未来へつなぐ陶芸―伝統工芸のチカラ展」や「心象工芸展」などの展覧会出品作を重点的に購入したことが挙げられる。研究の成果としての展覧会から収集へとつなげたことで、若い世代の作家にも目配りしつつ、年代、ジャンルともにバランスの取れた収蔵を進めることができた。

〈寄贈〉

まとまった作品受贈として加藤唐九郎の茶碗、髙橋禎彦によるガラス作品を収蔵することができた。加藤唐九郎作品は主に1960代後半から1970代半ばに制作された作品でいずれの作品も加藤唐九郎の制作の独創性や幅広さを感じさせる優品である。髙橋禎彦作品は1987年から2019年までの30年以上にわたり作家の造形思考の変遷と、ガラスによる表現の多様性を伝える構成となっている。第39回日本伝統工芸展出品作である中川衛作品など入手が困難で資料的な価値が高い作品を収蔵することができた。いずれもコレクションの欠落を埋めるとともに、今後の研究に寄与することが期待される。

北大路魯山人《織部蟹絵丸平向付》1957年
撮影：品野塁

加藤唐九郎《志野茶盌　潟の春》1966年
撮影：品野塁

京都国立近代美術館

〈購入〉

松田権六《蒔絵勇馬図平卓》(1937年) 及び《蒔絵竹に雀図二段卓》(1968年)、鏑木清方《ためさるゝ日》(1918年) の３点とともに、エドワード・J・スタイケン《グレタ・ガルボ》(1928年) などアーノルド・ギルバート氏旧蔵の写真コレクション計25件 (51点)、また、現代作家同時代購入の枠では、八代清水六兵衛《RELATION96-B》(1996年) や小林正和《WIND-4 (風-4)》(1975年)、風間サチコ《McColonialdシリーズ》４点組 (2003年) など18点を購入した。漆芸の松田権六も日本画の鏑木清方も、それぞれの分野の最重要人物であり、京都国立近代美術館が主な収集対象とする京都の工芸や絵画と比較し関連付けることのできる作家である。ギルバート氏の写真コレクションについては、京都国立近代美術館は既に1,050点を収蔵しているが、今回購入したのは故ギルバート氏が生前に手放せなかった特に大切なものばかりであり、この収蔵によってコレクションの真価を見せることができるようになったといえる。

〈寄贈〉

令和６年度にも多数の寄贈があったが、中でも特筆に値するのは、洋画家の油彩・水彩・素描などのコレクションが一括寄贈されたことである。青木繁《エスキース》(1904年) や松本竣介《風景 (代々木駅裏口)》(1947年頃) など展覧会でも馴染みの作品や、安井曽太郎《湯河原風景 (晩秋の湯河原)》(1952年) や小出楢重《裸女》(1928年) など永らく行方不明になっていた作品、村山槐多《静物》(1915年) や中村彝《芍薬図》など新たに見出された作品を含む計48点のコレクションである。これまで京都国立近代美術館で収蔵する機会のなかった作家の作品が多数あり、所蔵作品展や館外への貸与などで大いに活用できると期待される。富岡鉄斎《群仙図》(1892年) を含む羽倉可亭旧蔵の書画資料も一括寄贈された。平成24年度の「山口華楊」に出品された山口華楊の代表作《七面鳥》(1953年) が寄贈されたほか、令和５年度の「開館60周年記念 走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代」「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」や令和６年度の「倉俣史朗のデザイン―記憶のなかの小宇宙」「LOVEファッション―私を着がえるとき」など京都国立近代美術館が近年開催した展覧会において展示された作品が多数寄贈されたことも、令和６年度の特色である。

安井曽太郎《湯河原風景 (晩秋の湯河原)》
1952年

富岡鉄斎《群仙図》1892年

国立映画アーカイブ

〈購入〉

上映企画に伴う映画フィルム購入に関しては、「日本映画と音楽 1950年代から1960年代の作曲家たち」に伴い、『花嫁の峰チョゴリザ』（1959年）等４作品、４本のフィルムを購入し、芥川也寸志や松村禎三ら著名作曲家が映画で達成した重要な仕事を収集することができた。また、「没後50年 映画監督 田坂具隆」に伴い、『湖の琴』（1966年）等６作品、10本のフィルムを購入し、日本映画の巨匠に関するコレクションの欠落を埋めることができた。また「日本の女性映画人（3）――1990年代」に伴い、『UNLOVED』（2002年）等８作品、８本のフィルムと、『ルッキング・フォー・フミコ』（1993年）等11作品のデジタル上映用及び保存用素材を購入し、1970年代以降の独立系製作会社や個人の映像作家による貴重な文化記録映画や自主映画の重要作を収集することができた。

その他、戦前は劇映画のメジャー作、戦後は中小プロダクションで教育映画を量産し、日本映画の多様性を支えた重要作家・木村荘十二について、５作品、10本のフィルムを購入することができたことも、非常に意義があった。

〈寄贈〉

令和６年度の映画フィルムの寄贈受け入れ本数は、2,777本、30件であった。東映株式会社から241作品（382本）、国際放映株式会社から20作品（101本）の劇映画の原版寄贈を受けたのをはじめ、手塚プロダクションからテレビアニメ原版を中心とした409作品（985本）を、柳原良平の遺族からは、柳原の代表的アニメーション26作品（30本）を受贈した。また、文化映画新社旧蔵の原版やプリント190作品（313本）の寄贈と、京都市からニュース映画等399作品（625本）の寄贈を受けたことも特筆に値する。

映画関連資料については、例年通り映画会社・個人などから多種の資料寄贈を受けている。令和６年度収蔵した主要な寄贈資料としては、一般財団法人草月会より製作資料、脚本など勅使河原プロダクション旧蔵品3,314点、久松正明氏より写真、製作資料など久松静児監督旧蔵品10,673点、松竹株式会社よりロビーカードなど7,426点、有限会社和田誠事務所よりアニメーション映画『MURDER!』セル画など244点、中川洋吉氏より洋書・洋雑誌、和雑誌など433点、白倉民子、白倉誠子両氏よりスナップ写真ほか撮影監督飯村正旧蔵品317点等が挙げられる。

『湖の琴』（1966年、田坂具隆監督）

『ルッキング・フォー・フミコ』（1993年、栗原奈名子監督）

国立西洋美術館

〈購入〉

中期計画に記された国立西洋美術館の収集方針に則って購入を行った。とくに近年力を入れてきた女性作家の作品の収集という観点からは、フェーデ・ガリツィアとラヴィニア・フォンターナという希少なオールドマスターの女性画家２人の作品を一度に取得できたことは特筆に値する。版画については、継続して収集を続けているレンブラント、ベランジュ、デューラーの版画を購入できたことでコレクションの厚みが増した。とくにデューラーは《小受難伝》は彼の版画連作を語る上でも当時の信仰と芸術の関係を考える上でも欠かすことのできない重要な作品であるが、出版時のテキスト入りの初版の全点揃いという点で非常に稀である。今回の購入は国立西洋美術館の版画収集においても画期的なものといえる。

〈寄贈〉

ジュエリーデザイナーの梶光夫氏より148点のエマーユ作品の寄贈を受けた。19世紀後半からアール・ヌーヴォーの時代である20世紀初頭のフランスで制作された作品が中心である。国立西洋美術館にとっては、まとまった数の工芸品としては2012年の橋本コレクション以来の収蔵となる。国内では極めて稀なエマーユ・コレクションの受け入れによって、国立西洋美術館の装飾芸術のコレクションに新たなジャンルを加えるとともに、1900年前後のフランス近代美術の厚みを増すことができた。

ラヴィニア・フォンターナ《アントニエッタ・ゴンザレスの肖像》1595年？

ポール・ボノー《ルネサンス期ファッションの若い女性像》1907年
撮影：上野則宏

国立国際美術館

〈購入〉

ルース・アサワ《無題（S.317、壁掛け式、中央部は開いた五芒星と枝が重なりあう形にワイヤーを縛ったもの）》（1965年頃）、ヨシダミノル《Just Curve ‘67 12 polycycle》（1967年）を購入することができた。前者は、日系移民二世であるアメリカの女性立体造形作家、アサワの大型作品である。本国のみならず国際的に再評価が進むアサワの作品を、そのルーツである日本国内で初めて収蔵することが叶った。これにより、海外日系人作家についての更なる調査研究を進展し、グローバルな美術史における日本の位置づけをより明らかなものとしていきたい。またヨシダは、関西の前衛グループ「具体美術協会」に参加し、後年にはパフォーマンス活動でも知られている。本作は透明アクリル樹脂を用いたヨシダのキネティック・アートの代表作の一点である。けたたましいブザーが鳴り響き、それとともにアクリル板がまわることで蛍光色の光が展示空間を満たす本作を通して、60年代後半の具体の活動、そしてヨシダミノルの芸術の意義を再検討することが可能となる。このほか、近年積極的に収集を進めている非欧米地域出身作家として、ミン・ウォン（シンガポール）、ソピアップ・ピッチ（カンボジア）、袁廣鳴（ユェン・グァンミン）（台湾）、キム・アヨン（韓国）の作品を購入することができた。女性作家としては、国内の公立美術館に遺族が長らく寄託していた田部光子の初期の佳作や、アメリカのモーリーン・ギャレスの絵画作品など、未収蔵であった重要作家の作品をコレクションに加えることができた。

〈寄贈〉

国外で先行して評価が進むも、国内においてはパブリック・コレクションに収蔵されていない今井麗の絵画を受贈することができた。国立国際美術館は現代絵画に関する調査研究を継続的に行っているが、今回の収蔵はこうした研究に資するものである。また、具体美術協会のメンバーで、当館のコレクションには未収蔵であった浮田要三の絵画作品を受贈した。田部光子の旧蔵になる小沢剛の《なすび画廊ー会田誠展》（1994年）は、90年代以後の日本美術において、ともに重要な足跡を残している小沢剛と会田誠（いずれも所蔵作家）の交流を示す。田部が所蔵していたという事実も含めて、重要な作品を収蔵する運びとなった。杉本博司が当館所蔵のアルベルト・ジャコメッティ彫刻作品を撮影した《Past Presence 091, Yanaihara I, Alberto Giacometti》（2024年）は、当館が制作に協力したことから受贈した。同作家の作品は既に20点以上所蔵しているが、未収蔵であった「Past Presence」シリーズからの初収蔵となった。

ルース・アサワ《無題（S.317、壁掛け式、中央部は開いた五芒星と枝が重なりあう形にワイヤーを縛ったもの）》1965年頃
撮影：福永一夫

ミン・ウォン《ライフ・オブ・イミテーション》2009年

7—2　所蔵作品の修理・修復

館　　名	点数	主な修復作品
東京国立近代美術館	231	熊岡美彦《珠江口掃海》(1940年)
国立工芸館	5	河井寛次郎《辰砂扁壺》(1937年)
京都国立近代美術館	92	中村康平《記憶回路A－Ⅰ・Ⅱ》(1989年)
国立西洋美術館	136	ルイ=レオポルド・ボワイー《トロンプ・ルイユ：クリストフ・フィリップ・オベルカンフの肖像》(1815年)
国立国際美術館	577	ヨシダミノル《The Orange Tent》(1966年)

(単位：本)

館名	修復作品総数	デジタル復元	ノイズリダクション等	不燃化作　業	映画フィルム洗浄	主な修復フィルム
国立映画アーカイブ	79	1	18	33	27	『ルッキング・フォー・フミコ』(1993年)、『明け行く空』(1929年)

7—3　所蔵作品の貸与

美術作品の貸与等

館　　名	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
東京国立近代美術館	69	382	206	378
国立工芸館	17	114	23	66
京都国立近代美術館	57	888	80	148
国立西洋美術館	16	214	100	174
国立国際美術館	20	96	29	116
合　計	179	1,694	438	882

写真作品閲覧制度(プリントスタディ)※

館　　名	利用件数	閲覧者数	閲覧作品数
東京国立近代美術館	2	3	60

※所蔵する写真作品を、申込制によって個別に閲覧できる制度。

映画フィルムの貸与等

館　　名	貸出		特別映写観覧		複製利用		データ利用	
	件数	本数	件数	本数	件数	本数	件数	本数
国立映画アーカイブ	79	162	59	151	45	79	16	29

映画関連資料の貸与等

館　　名	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
国立映画アーカイブ	9	93	68	1,618

8 ナショナルセンターとしての活動

8—1　国内外の美術館等との連携・協力等

各館とも展覧会や上映会の開催に合わせたシンポジウム、研究会、講演会等の開催や、国際会議への出席等を通じて人的ネットワークの構築を積極的に行った。また、国立アートリサーチセンターの活動について、保存修復ワークショップ等の開催や国立美術館のコレクションを活用した「コレクション・プラス」を通じた国内外美術館等との連携促進、「全国美術館収蔵品サーチ（SHŪZŌ）」や「日本アーティスト事典」の拡充による国内美術資料の可視化と研究基盤の強化への貢献、アクセシビリティ講座や文化的処方の推進を通じ、美術と社会福祉を結ぶ新たな実践の実現、アーティスト支援を通じた日本美術の国際的価値向上と人的交流の推進などを通じて、美術館と社会をつなぐ研究と実践のハブ機能を着実に進めている。

国内外の研究者の招へいによるシンポジウムの開催等

館　　名	所蔵作品等に関する セミナー・シンポジウムの開催回数	国内外の研究者の招へい等に基づく セミナー・シンポジウムの開催回数
国立アートリサーチセンター	—	15
東京国立近代美術館	3	3
国立工芸館	2	9
京都国立近代美術館	0	13
国立映画アーカイブ	0	4
国立西洋美術館	5	9
国立国際美術館	2	5
国立新美術館	—	6
合　計	12	64

企画展・上映会等の共同主催と共同研究

全国の美術館等との企画展の共同主催やそれに伴う共同研究等を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組んだ。

館　　名	共同主催件数	共同研究件数
東京国立近代美術館	1	2
国立工芸館	1	1
京都国立近代美術館	6	7
国立映画アーカイブ	14	14
国立西洋美術館	3	3
国立国際美術館	—	1
国立新美術館	3	3
合　計	28	31

8―2　美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施

国立美術館は、美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施している。同研修は、学校や美術館で鑑賞教育に携わる教員、学芸員に対して実践的な研修を行うもので、修了者が研修の成果を各地域の学校等、現場で実践することで、鑑賞教育の充実を図っている。各地域の学校と美術館との連携強化を図るとともに、全国の児童生徒に対する鑑賞教育の充実に貢献している。

19年目となる「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は東京で開催し、コロナ禍以前の規模と同程度の98名が修了した。グループワークでは小学校、中学校、高校のグループに加え、引き続き特別支援教育をテーマにしたグループを作り、障がいの種類、度合が様々な児童・生徒に対してどのような鑑賞や授業ができるのか、参加者同士で議論を深めた。

また、本研修の記録をまとめた報告書をウェブサイトで公開した。

・修了者数：98名（小学校教諭21名、中学校教諭16名、高等学校教諭16名、中高一貫校2名、特別支援学校教諭等8名、指導主事13名、学芸員22名）
・会　　期：令和６年７月29日（月）、７月30日（火）
・会　　場：東京国立近代美術館、国立新美術館
・参加者の満足度：99.0%（目標：98.8%）
・Web報告書：https://ncar.artmuseums.go.jp/reports/learning/post2025-2129.html

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修
グループワークの様子

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修
ワールドカフェの様子

8―3　キュレーター研修、インターンシップ、博物館実習

公私立美術館の学芸担当職員の専門知識の向上等を図ることを目的とした「キュレーター研修」を実施した。また、インターンシップ、博物館実習※を実施した。

館　　名	キュレーター研修 受入人数	インターンシップ 受入人数	博物館実習 受入人数
東京国立近代美術館	3	5	―
国立工芸館	1	0	―
京都国立近代美術館	3	6	―
国立映画アーカイブ	―	2	12
国立西洋美術館	2	3	―
国立国際美術館	2	6	―
国立新美術館	1	6	―
合　計	12	28	12

※大学における学芸員養成教育において、登録博物館または博物館指定施設（大学においてこれに準ずると認めた施設を含む）での実習により修得する博物館に関する科目の一つ。

8―4　アートカード・セット

アートカードのより一層の普及のため、令和６年９月に第５版を出版社と共同発行し、アートカードを全国の書店や通信販売で入手できるようにした。

「国立美術館アートカード・セット」

9 決算報告

（単位：百万円）

	予算金額	決算金額	増△減額
収入			
運営費交付金	8,050	8,050	―
展示事業等収入	1,679	1,820	140
施設整備費補助金	100	425	325
文化芸術振興費補助金	―	5	5
受託収入	―	344	344
寄附金収入	650	1,156	506
合　計	10,479	11,799	1,320
支出			
運営事業費	9,729	11,469	△1,740
管理部門経費			
うち人件費	1,537	1,348	189
うち一般管理費	954	1,308	△354
事業部門経費	7,238	8,813	△1,575
うち美術振興事業費	3,693	3,448	245
うちナショナルコレクション形成・継承事業費	2,264	3,978	△1,714
うちナショナルセンター事業費	1,282	1,388	△106
施設整備費	100	425	△325
文化芸術振興費	―	5	△5
受託事業費	―	344	△344
寄附金事業費	650	576	74
合　計	10,479	12,820	△2,341
収支差引	0	△1,021	△1,021

注　金額は単位未満四捨五入のため、合計が合致しない場合がある。

10 会員制度等

MOMATサポーターズ（友の会）

館　　名	年度末会員数計
東京国立近代美術館	684

賛助会員

館　　名	個人会員	維持会員	特別会員	一般会員	プレミアム会員	年度末会員数計
東京国立近代美術館	208	18	18		3	247
京都国立近代美術館	16		1	6		23
国立国際美術館			4	10		14

MOMAT支援サークル

館　　名	プラチナパートナー	ゴールドパートナー	シルバーパートナー	年度末会員数計
東京国立近代美術館	3	5	10	18

OKパスポート

館　　名	ミュージアムパス	コレクションパス	合　　計
京都国立近代美術館	373	3	376
国立国際美術館	183	2	185

キャンパスメンバーズ

国立美術館全体の事業として平成18年12月から実施している、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」については、令和６年度は１校の新規加盟があり、合計107校となった。これは制度開始以来最高の加盟校数である。（利用者数90,362人）

入会校数	利用者数
107学校・法人	90,362

キャンパスメンバーズ特設サイトURL：https://www.campusmembers.jp/

11 名簿

令和７年３月31日現在

役員等	理事長・国立新美術館長	逢坂　恵理子
	理事・国立西洋美術館長	田中　正之
	理事・本部事務局長	石﨑　宏明
	理事	渡部　葉子
	監事	田中　　淳
	監事	茶田　佳世子
	東京国立近代美術館長	小松　弥生
	国立工芸館長	唐澤　昌宏
	京都国立近代美術館長	福永　　治
	国立映画アーカイブ館長	岡島　尚志
	国立国際美術館長	島　　敦彦
	国立アートリサーチセンター長	片岡　真実

運営委員	今橋　映子	（東京大学大学院総合文化研究科教授）
	内田　篤呉	（MOA美術館長）
	篠原　資明	（京都大学名誉教授）
	島谷　弘幸	（独立行政法人国立文化財機構理事長、皇居三の丸尚蔵館長）
	田端　一恵	（社会福祉法人グロー東近江障害施設群総合施設長）
	柄　　博子	（東京外国語大学監事）
	冨田　　章	（東京ステーションギャラリー館長）
	仲町　啓子	（実践女子大学名誉教授、秋田県立近代美術館特任館長）
	樋田　豊次郎	（美術史家）
	平野　共余子	（映画史家）
	松本　正道	（アテネ・フランセ文化事業株式会社代表取締役）
	森迫　清貴	（京都工芸繊維大学前学長）
	矢ヶ崎　紀子	（東京女子大学副学長、現代教養学部国際社会学科教授）

外部評価委員	岡田　温司	（京都大学名誉教授、京都精華大学大学院特任教授）
	熊倉　純子	（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）
	黒川　廣子	（東京藝術大学大学美術館長）
	深井　晃子	（公益財団法人京都服飾文化研究財団理事／名誉キュレーター）
	宮澤　誠一	（日本大学名誉教授）
	湯浅　真奈美	（ブリティッシュ・カウンシル東アジア地域アーツ部門ディレクター）

独立行政法人国立美術館本部事務局

東京国立近代美術館内
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL：03-3214-2561
FAX：03-2314-2577
URL：https://www.artmuseums.go.jp/

各種報告書等リンク先　https://www.artmuseums.go.jp/corporate_info/gyoumu/houkoku

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

ISSN 2189-8065